

ライダーウェポン使いの青春ラブコメ リメイクバージョン

G・himagin

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

15年前に起きた大規模パンデミック、「ガイアブレイク」と「ゼロデイ」

これは同時に起きたこの現象に対応する為に出来た「レイズ」という組織に所属する高校生のお話……

タグに入り切らなかったもの

- ・ 原作崩壊
- ・ 彩加×オリキャラ

目次

プロローグ

PROLOG ORIGINAL GIRL HERO SIDE

E |-----| 1

PROLOG 2 HERO SIDE |-----| 5

設定 (キャラ以外) |-----| 8

1章

比企谷八幡は夢を見る |-----| 10

(案の定) 比企谷八幡は呼び出され、そして向かう |-----| 15

今日も比企谷家は平和である |-----| 21

戦働蒼は比企谷八幡との出会いを思い返す |-----| 26

比企谷八幡はオペをする |-----| 29

比企谷八幡はオペをする (2) |-----| 33

比企谷八幡は戦働蒼と食事をし、相談に乗る |-----| 36

材木座義輝は色々作る |-----| 39

戸塚彩加は特訓をし、三浦優美子は話がわかる |-----| 44

戦働蒼達は迎え、戦闘へとなる |-----| 48

戦働蒼は新たな力で挑む |-----| 52

コイツらはイチャつく時はイチャつく 前編 |-----| 54

コイツらはイチャつく時はイチャつく 後編 |-----| 57

川崎沙希は愛されている |-----| 61

(予想通り) 比企谷八幡はバレてしまう |-----| 66

雪ノ下は惨敗する |-----| 70

2章

XXXは生きたいと願う |-----| 77

男は全てを知っている――少女は生きている事を実感する――	80
クロは大暴れをする――	86
戸塚彩加は狂犬と化す――	89
リベルは救世主に出会う――	93
由比ヶ浜結衣は比企谷八幡と友になる――	97
八幡達は行動を開始する――	100

プロローグ
PROLOG ORIGINAL GIRL HE
RO SIDE

三人称side

とある廃工場で4人の男が何かを探していた

「ホントにここにあるのかあ?」

「うるせえよ、黙って探せ」

「へいへい……つと、みーつけた!」

1人の男がゲームカセットのようなものを拾い上げる

「どれどれ……チツ、【POLICE BREAKER】かよ……外れだ」

「なんだよ……ここにや上質なガシヤットがあるんじゃねえのか?」

「だからレイズに潰されたんだろうが……ボスはどうしてここに俺らを出したんだよ、クソツ」

「噂じやかなり高性能のガシヤットがあるらしいぞ……つと!」

別の男が噂の話をしていると別のガシヤットを見つけ、拾い上げ驚愕する

「まじかよ!」

「どうした?」

「【GUARDIAN WAR】だよ!単価40万越えの超高性能ガシヤット!」

「まじかよやったぜ!それじゃあ撤退して——」

「——どうするの?」

「あ、そんなの……ツ!」

ガシヤットをアタツシユケースにしまっていた男達はその工場に響いた女性の声に答えているが違和感に気付き振り向くと顔色が真っ青になる

「お、おま、お前誰だ!」

「私はレイズの特・殊・犯・罪・専・門・課の人間よ……さて、痛い目に遭わずに

お縄につきたいなら両手をあげようか」

「は、はあ？特犯だど?!お前みたいな女が!？」

「女性なら、なにかな？」

「ぶっ潰す！」

特殊犯罪専門課を名乗る女性は外見は高校生な上に武装が何も無く、男達は油断し殴り掛かる

「ハア……痛いのお望みのようね」

「なに？ぐふっ!？」

拳を躲し腹に拳を叩き込み男の足を払い倒して男の両手を手錠で拘束する

「なっ……このガキイ！」

「シッ……！」

蹴りを躲し女性はガラ空きの男の顔面に膝蹴りを決め、胸部に強烈な蹴りをいれる

「ガハアッ!？」

「ふう……さて、残りふたりはどうするのかな？」

「ちよつち強いからって舐めんなよ！」

「俺らにはこれがある！」

2人の男は先程回収したガシヤット取り出す

「だよね〜」

女性は最早呆れきっており、阿呆を見るような目で見る

POLICE BREAKER!

GUARDIAN WAR!

ガシヤットの起動ボタンを押すと男達の背後にゲーム画面が出現し廃工場内がゲームフィールドへと変わる、同時にガシヤットのデータ格納領域に存在している装備が召喚される

ポリスブレイカーを起動した男には警棒のような武器が、ガーディアンウォーを起動した男には盾と拳銃が握られ、優位に立ったと男達は確信し、女性に近寄る

「……しようがない、特段痛い目に合わないかわからないようね」

女性は胸ポケットからUSBメモリに似たものを取り出す

「さあ、舞いましょう……展開」

TRIGGER!

女性はメモリのボタンを押し起動、左手の腕時計にメモリを差し込む

すると女性の周囲に蒼い軽装甲が出現し女性に装着され、蒼いレンズの眼鏡が着けられる

最後に召喚された蒼い《W》の字が刻まれた銃を握り、展開が完了した

「特殊犯罪対応法第20条、【不法に製作されたガシヤット、ガイアメモリの購入及び回収、並びにそれ等を利用した犯罪】に抵触する行為……しつかり、裁かせてもらおうよ!」

「ほざけ!」

警棒のようなものを振りかぶる男とその後ろで銃を撃つ男、しかし男達が攻撃しようとした先に女性は居らず、拳銃を持った男の側頭部に強烈な衝撃が加わり、意識を一瞬で持たてられる

「ガッ!」

その声で女性の居場所を察知した警棒を持つ男は背後に警棒を振るうが途中で止められる

「……」

女性は既に男の真後ろまで迫っており、警棒を片手で捉えていた

「……」

「……」

睨み合う両者、そして――

「死ねクソアマアア!!」

「ッ……!」

男が女性に蹴りを入れ、女性は軽く仰け反る

「勝った!」

思わず口から出る勝利を確信した声、全力で警棒振り下ろし女性の頭蓋骨を砕くであろうその一撃は――

LIGHTNING! MAXIMUM DRIVE!

女性の持つ銃から放たれた電撃により妨害され、男は痺れて動けな

くなる

「あつぶな……よし、逮捕」

「く、そ……！」

女性——戦働蒼は手早く3人に手錠をかけ、部下がレイズの車両で待っている場所へと向かった

PROLOG 2 HERO SIDE

三人称 side

「よし、行くぞ彩加」

「うん、やるよ八幡」

STAGE SELECT!

レイズ 特殊医療課に有る手術室、そこには医療器具は一切なく、患者と医者である高校生が2人いるのみ

そして八幡と呼ばれた腕輪に着いているスロットのボタンを押す、すると特殊医療フィールドが展開され、辺り一面が草原へと変わる
爽やかな風が吹き、医者は深呼吸をする

するとフィールドの効力により、患者の中に潜伏しているウイルス——バグスターウイルスが活性化、エリア内で巨大化し、ゴーレムのような形のユニオンバグスターになる

「ゴーレムか……」

「ミニオンだね？倒せば完全状態に具現化しないんだよね？」

「の、筈だ」

ゴーレム型のミニオンバグスターが突進して来ると八幡と彩加は左右に飛び回避し、腰にガシシャツを取り出す

TADDLE QUEST!

GIRGIRI CHANBARA!

2人がガシシャツを起動し腕輪のスロットに入れる

「展開！」

ガシシャツ！

2人がスロットに入れると同時に八幡には西洋の軽装甲が、彩加には侍のような軽装甲が装着され、八幡には赤い炎のような刀身の片手剣が、彩加には両端がピンクの刃が付いた弓が握られる

「くっよー」

彩加がバグスターの振り下ろされた拳を軽快に躲し、腕を走り、肩を踏み台にしてユニオンバグスターの頭にエネルギーの矢をぶち込む

—グオオアアアアアアアア!!—

ユニオンバグスターは腕を振り上げ彩加に強烈な衝撃が走り吹っ飛ばされる

さらに追撃をしようとした時八幡が右肩の関節部分に剣を突き刺し、さらに剣を持った状態で両足蹴りを決め、ユニオンバグスターの右肩と右腕が切り離される

「彩加わりい！大丈夫か!？」

「ゴホッ、ゴホッ………大丈夫だよ」

少し息を整えた彩加は立ち、ギリギリチャンバラガシヤットを弓——ガシヤコンスパローに、八幡はタドルクエストガシヤットを剣——ガシヤコンソードに入れる

ガシヤット！キメワザ！

TADDLE！CRITICAL FINISH！

GIRGIRI！CRITICAL FINISH！

「そらよっ！」

「ハアアッ！」

八幡が炎が纏われたガシヤコンソードによる斬撃を繰り返し、そこに彩加の2本のエネルギーの矢が追撃する

しかし、それでもユニオンバグスターは倒れず立ち上がろうとする

八幡はタドルクエストを彩加へと投げる

「彩加、これ使ってくれ」

「八幡、ありがとう！」

彩加はタドルクエストガシヤットをガシヤコンスパローに入れる
ガシヤット！キメワザ！

彩加はユニオンバグスターの急所——頭部に向けて左手でガシヤコンスパローを構え先端部分に右指を添え、弓を引くように動かす。すると先端部分からガシヤコンソードに似た剣のようなエネルギーが出てくる

更に引くとエネルギーは大きくなり、エネルギーの長さは2m近いサイズになる

TADDLE！CRITICAL FINISH！

「……………貫いて」

その一言と共に弓を射るとエネルギーの大剣は放たれ、反動のように強風が発生し草を靡かせる

大剣は初速は早く、減速するどころか加速し彩加の願いが届いたかのようにユニオンバグスターを貫き、空へと向かい、雲を払う

ユニオンバグスターは核を失い、ゆっくりと崩壊していく

「……………終わった、よね？」

「そのハズだ」

GAME CLEAR!

患者を担いだ八幡と展開を解除した彩加の耳にその音声が鳴ると、2人はハイタッチをする

「よっしゃ！」

フィールドは解除され、八幡は患者を病室に運び、彩加は報告書を描き始めた

設定（キャラ以外）

レイズ

英語表記は「L A Y Z」

本編15年前に起きた大規模パンデミック【ガイアブレイク】と【ゼロデイ】から発生したバグスターウイルスの治療やガイアブレイク時のデータを流用して作られた違法ガシヤットの取り締まりを主に行っている

独自の技術によりガイアブレイク時のデータを回収しガイアメモリを作り上げ、ガイアブレイク時のデータを使いバグスターウイルスを抗体を持つていれば安全な状態にすることに成功、ガシヤットを作り出すことが出来る

レイズ内では大まかに【特殊犯罪専門課】【特殊医療課】【技術課】の3つに分けられている

特殊犯罪専門課は違法ガシヤット、ガイアブレイク時のデータ回収、違法ガシヤットを開発、使用してる者たちの逮捕をしていて、特殊医療課はバグスターウイルスの治療をしている

技術課はガイアブレイク時のデータやバグスターウイルスを元に新たなアイテムを生み出したり等をしている

ガシヤット

ガイアブレイク時のデータを使い安全な状態にした善性バグスターウイルスをゲームカセット形の端末にしたもの、善性バグスターウイルスが悪性バグスターウイルスを破壊する為これのみバグスターウイルスの治療が可能となる

専用ガシヤットは性能強化の為に善性ウイルスに改造を加えており、最低でも90%以上の適合率を持つ適合者が必要となり、90%を下回るとバグスターウイルスに感染する恐れが発生する

量産型のガシヤットは改造を一切加えておらず、基本誰でも使えるガシヤット使用者

M I G H T Y A C T I O N X 風間大牙（オリキャラ）

TADDLE QUEST 比企谷八幡

BANG BANG SHOOTING 花家ユウ

BAKUSOU BIKE&GIRRI CHANBARA

戸塚彩加

ガイアメモリ

ガイアブレイク時のデータをUSBメモリ型の端末にしたもの、ガイアブレイク時のデータをそのまま端末状にした状態の為ガイアブレイク時発生した毒素がそのまま使用者に降りかかる可能性があり、使用者には危険性を無くす為の毒素分解機として起動後すぐに専用のガジェットにメモリをいれることを必要とされる

またガイアメモリには軽装甲や武器の召喚に使われる金端子のコアメモリとコアメモリの機能拡張や特殊技使用、コアメモリの装備強化の為のアーマーマemoryがある

ガイアメモリ使用者

ACCEL&ENGINE テルイリユウ 照井琉

TRIGGER&LIGHTNING&LUNA 戦働蒼

違法ガシャット

レイズの許可なく製作されたガシャット全てが該当する。悪性バグスターウイルスの混入やガイアブレイクデータが人体の許容範囲を超えているものがあり、危険性ではレイズの上回る

1章

比企谷八幡は夢を見る

八幡 side

俺達は——の基地の一つである塔の最上階へと辿り着く

「追い詰めたぞ！」

俺が白い服を着た男にそう言う

「君の部下や怪人たちもこちらで始末をつけさせてもらった……もうおしまい、早くお縄に着いちやいなよ」

蒼も男に向かってそう言うも、男は高笑いをする

「ククククク……アーツハツハツハ！おしまいだと？ちがアう……ここから始まりなのさ！」

男は腰から青色の端子のガイアメモリ取り出しを起動する

「なっ……なんでアンタがそれを!？」

「お前を——のは俺なんだよ……お前が使ってるのも、俺の技術で作られたものだ……。同じものを一つや二つ持っても変じやないだろオ？」

リベルは当然驚き、そう言ってしまうが当然のように男は返し、ガイアメモリを自分の胸に突き立てる

「なっ……!?!？」

「知ってるかア？ガイアメモリは適合率が高い人間が直挿しすると体とガイアブレイクデータか融合するんだぜエエ……!!」

メモリは男の体に埋め込まれ、同時に身体がボロボロと崩れ始める
「これから……俺の創る新世界が生まれるんだよオオオオツ!!——

男の身体がバラバラになり、男の身体に埋め込まれたガイアメモリが核となり宙に浮く、そしてガイアメモリに鎧のようなものが生えてきて巨大なヒトガタになる

「ちよ……これ……もう人ですらないじゃん……!？」

「なんなのこれ……!?!？」

蒼が顔を青ざめそう言い、彩加も同様に呆然としてしまう

——俺は神……創造神——だアアア！——！！！！

男……否、創造神——を名乗るモノは塔の最上階の壁を吹き飛ばす

——創造神に刃向かうクズ虫共め……神罰を与えてやろう！！——

「……断る」

——何？——

「神を名乗るんじゃないやねえよ、お前は人間だ。ただの人間が神を名乗る資格なんざこの世のどこにもありやしねえんだ！」

「そうだよ……！君は——の——なんだよ、その事実からは逃げられない！」

「やるしか、ないよね！」

「そうだよ！」

——クズ虫共が……良いだろう、消してくれる！——

俺達はそれぞれのアイテムを取り出す

TADDLE FANTASY！

TRIGGER！UPGRADE！

Re：GIRGIRI CHANBARA！

「展開！」

「いくよッ！」

俺は魔王のようなアーマーを、蒼は重装甲で砲身の着いたアーマーが、彩加は金の増えたギリギリチャンバラのアーマーを装着、リベルはメモリスロットが4つついている槍を構える

——神に刃向かう虫共め……蹴散らしてくれ！——

「やってみろ！」

そして異形の腕が振り上げられたと同時に俺もガシヤコンソードを握る

そして——

ぎゅむ、と俺の上になにかが乗ってきた感覚で俺は目を覚ます
なにか重要な夢を見ていた気がしたんだが……気のせいか

「……」

頭を動かし、視界を窓側へと持っていく

自室の壁に付けられたデジタル時計は「06:45」を指しており、
この時間にはとあるイベントが起きることを俺は知っているので俺
に乗った奴も検討が着いた

「……朝イチで乗っちゃって起こすのはやめてくれない？小町」

俺の可愛い可愛い義妹の小町だ、6時45分までに起きないといっ
もこうやって起こしてくる

「ヤダよ、こうでもしないとお義兄ちゃん起きないじゃん」

「うぐ……」

否定出来ない、実際起きなかっただろうし……

「お義兄ちゃん最近まで6時半くらいには起きてたのに今日は起きな
かったじゃん、レイズが晩年人員不足なのはわかるけどさ。」

一応7時にはご飯出来てるし、着替えたりシャワー浴びたりするの
に30分くらいかかるんだから6時半には起きて欲しいって言うの
が義妹の願いなわけですよ」

「わーってるっての、お義母さんは？」

「お母さんならご飯作ってるよ。お父さんはランニング」

「わかった、んじゃ俺シャワー浴びてくるわ」

シャワーを浴びて俺は小町から渡された制服に着替えてリビング
に入り、椅子に座る

「お義母さん、おはよ」

「おはよ、ハチ」

「……いつも言ってるけどハチって呼ぶの犬みたいだからやめてく
れっての」

「いつも言ってるけどハチを保護した時からアンタのことハチって呼
んでるんだから今更無理よ」

「へいへい……って小町がつまみ食いしてる」

「お義兄ちゃん!?」

「おひいひやん!?!」

「よし小町、アンタ今晚覚えてなさいよ」

「ゆふして!？」

「許さん」

「ごくんっ……そんなあ!」

「よし今飲み込んだわね、マジで今晚覚えてなさいよ」

「鬼いちゃんが!鬼いちゃんがあ!」

「誰が鬼いちゃんだ」

「たでーま……どしたよ」

お義父さんが帰ってきたので、状況を説明する

「小町……母さん相手につまみ食いって、何してんだよホント」

「だって美味しそうなんだもん……」

「はあ……とりあえず俺も座るとするかな」

「ほい、これご飯ね」

「そんじゃあ」

「……いただきます」

朝食を食った俺達は各々の準備に取り掛かる

お義父さんお義母さんは仕事、小町は中学へ、俺はといえどある人物を待っている

すると扉が開き、待っていた人物リビングに入ってくる

「おつはよハチ君!」

「おはよう、蒼」

俺の一つ上の幼馴染であり恋人、戦働蒼だ

「さてさて、とりあえず昨日はお互いお疲れ!」

「マジで疲れた、3人も来るなんてさ……」

「特殊医療は毎年人員不足なんだよね……」

「そうだよ、新人研修で八割潰れるからな……、下手したら1人も来なかった年があるらしい」

「ヤバいね……」

「なんで高校生の俺らが耐えられて大人が耐えられねえんだとは思っちゃったがな」

そんな雑談をしていると、8時まで時計が進んでいたので俺はカバ

ンに弁当やら水筒やらを入れてチャリキーを取る

「ハチ君行くよー!」

「はいはい」

いつも通り既に蒼はチャリに乗っていたので俺もチャリに乗る

「それじゃあ行くぞー!」

「それ毎日言う必要があるか?」

……うん、まじでいつも通りだわ

(案の定) 比企谷八幡は呼び出され、そして向かう

『高校生活を振り返って』

『青春とは嘘であり悪である。』

青春を謳歌せし者たちは常に自己と周囲を欺き、自らを取り巻く環境のすべてを肯定的にとらえる。

彼らは青春の二文字の前ならばどんな一般的な解釈も社会通念も捻じ曲げて見せる。

彼らにかかれば嘘も秘密も罪科も失敗さえも青春のスパイスではないのだ。

仮に失敗することが青春のあかしであるのなら、友達作りに失敗した人間もまた青春のど真ん中でなければおかしいではないか。

しかし彼らはそれを認めないだろう。全ては彼らのご都合主義でしかない。

結論を言おう。

青春を楽しむ愚か者ども砕け散れ!』

……うん、我ながらアレな作品だな。今更だけど

「比企谷、なぜ呼び出されたか、言わなくてもわかってるよな?」

「……この作文ですよ?」

「なぜ文系は出来る比企谷がこんな作品を書いたのか疑問でしかないのだが?」

「深夜テンションで……最近仕事詰めですし」

「仕事か……ううむ……」

俺の座ってる椅子の前で平塚静先生が頭を抱える

「戸塚と材木座はまともなものを書いてるが……」

「あ、それは彩加が100%天使成分で構成されてるからです、俺はお察しですよ?材木座は文法力がそれなりにあるので」

「あと比企谷、お前がガンガン青春を謳歌しているだろうが……自殺志願者なのか?」

「平塚先生、ここ職員室です」

「つと……スマンな」

俺が蒼と付き合っていることは教師だと平塚先生しか知らない
伝えた時に『な”ん”で”だ”よ”お”お”お”?!』と血涙された時に2
人で必死に慰めたのはお察しだと思う

「とりあえず書き直した、こんなのを評価出来るわけない」

「デスヨネ」

「と、同時に私の手伝いをしてくれ」

「は？」

「いや、私がつくった部活があるんだが…」

「あ、人数合わせに入れと」

「そうだ」

……レイズさえ出来れば問題ない、そう言おうと思ったが

「勿論レイズの件は問題ない」

「あ……人数合わせって聞きましたけど何人いるんすか」

「2人」

「全然足りねーじゃん！」

「すまん……」

「あ、1人入ってくれそうな人居ますよ」

「戦働か？」

「ええ、ちと電話しますね」

俺は蒼に電話を掛ける

『もしもし、ハチ君どうしたの？』

「平塚先生が自分のつくった部活に入って欲しいらしい、人数合わせ
でレイズの日は休みでOKだそうだ。モチのロンだが俺も入る」

『わかった、いいよ』

「サンキュー、じゃあ職員室来て欲しい」

『はいはい』

俺はスマホの通話ボタンを切り、平塚先生の方をむく

「OKだそうです」

「わかった、戦働が来次第行くぞ」

「うい」

そして2分とちよいして蒼が着た

「はーい、戦働蒼来ましたよ」

「すまないな、じゃあ向かうか」

道中で雑談をしながら平塚先生について行く形で向かう

「……比企谷に聞きたいことがあったんだが、いいか？かなりデリケードだが…」

「いいですよ」

「比企谷の親はお前を産んだ父親の兄らしいな」

「……はい」

「なんでそうなったんだ？」

俺は「お義父さんから聞いた話である」と、言ってから話す

「俺を産んだ親は女の子が欲しかったらしいです」

「……ほお」

「で、生まれた俺は男……だから育児を放棄しようとしていた、らしいです」

「……一方でウチの両親は結婚して4年近く経ちますが子供が出来ず、産んだのに育児放棄で殺そうとする。遺伝子提供者、と呼ばせて頂きますが、彼等に対して怒りを爆発させて俺を引き取ったらいいです」

「……なんというか、生みの親は、その…」

「クズだと思ってます。そもそもなんで墮胎しなかったのか……」

「紛うことなき人間のクズね」

蒼もそう評し、少し微妙な空気が流れるとかの部屋に着く

「……ここか」

「奉仕部、と名付けている」

「奉仕部？」「ハチ君？」まだ言っただけだぞ」

「絶対そういう意味だと思ってるでしょ」

「……ごめん、俺もそれとしか思えなかった」

「何馬鹿なことを言ってる、入るぞ」

平塚先生はノックすることも無く扉を開け、部屋の主……というか唯一の部員から文句を言われていた

「……部屋に入る時はノックしてとあれほど言ってるじゃないですか。というか平塚先生以外が来るなんて珍しいですね」

「すまんな、入部希望者だ」

「……そのぬぼーっとした人はともかく、どうして戦働蒼さんがここに？」

「あれ？私のことを知っていて何でハチ君を知らないのかな？ハチ君テストテストの総合1位か2位なのに」

今更だが、俺と蒼姉は上位2位を独占している。

点数が1、2点しか違わない、基本オール満点か一科目だけ97点とかその辺だ。まあ落ちるのは理科か数学だし問題ないけど。

「私より上だと戦働蒼さんか比企谷八幡くんしかいないから、この人が」

「比企谷八幡だ。比企谷と戦働はバイトで週一か週二しか部活に参加出来ないが、よろしく頼む。すまん、会議だ」

「いつてらっしや〜い」

平塚先生はダツシユで職員会議に向かった。

いや走んなよ……ぶつかったら死ぬ速度だぞあれ

「……さて、一応自己紹介しときましようか、知らないことは無いでしようけど雪ノ下雪乃よ」

こいつ雪ノ下つて言うのか……ん？雪ノ下？

「へ〜…雪ノ下さんね、私は戦働蒼、よろしく」

「比企谷八幡だ」

「よろしく……つと、比企谷くん今すぐに戦働さんから離れなさい。警察に言うわよ」

「ん？何言ってるのかな？ハチ君と私の距離は学校以外ではこれくらいよ？部活、しかも貴方以外誰もいないんだからこの距離でもいいんじゃない？」

「蒼落ち着け。この程度でムキになんな」

蒼姉の頭を撫でながら説得する

「も、もう……今回だけだよ？／／／」

「貴方に止められなくても私がどうにか出来たわ」

「無理だな、蒼口喧嘩無茶苦茶強いし、そもそもお前の価値観を俺に押し付けんな。……カップル位ならこれくらい普通だろ」

「ちよ、ハチ君!」

「蒼、ごめん……俺と蒼はカップルだ、付き合っている」

「あら? あなたのような人がどうやって戦働さんに近付いたのかしら? 脅し?」

「……幼馴染なものでな、昔からの付き合いだ。中学の時告白されて付き合った、あと俺から近づいたのならともかく、蒼から近づいたの忘れたか?」

「なら貴方から距離をとれば「ハチ君が言ってる通り他人の価値観に口出ししないでくれないかな? 私達は付き合い合ってるんだしこれくらい普通だと思おうよ? 普段は隠してるけど」……」

睨むな、全然怖くない

「そっぴやここつて何部? 内容的な意味でさ」

「ならクイズ形式にしましょう、ここは何部でしょう?」

考えるが全然答えに行き着かない、読書部? まさか、んなアホな……
そう思っていると蒼が口を開く

「……ヒント」

「ハッ……学年1位と2位がこの程度の問題もわからないなんて「なんとなくわかった。後は決定的根拠が欲しいだけ」あらそう、ならヒント……人数は要らない、私がここでこうしていることが部活内容よ」

「お悩み解決部、又はそれと似たもの」

……はえ? どうしてそうなる?

「……正解よ、その1位は何をしていたのかしら?」

「すまん、どうしてそうなる?」

「人数が足りない、つまり一人でもできる。ここにるのが部活、つまり誰かが来るのを待っている。読書部なんて存在意義ないし何かを作る感じでもない、そんな部活ならもつと人が来るし人数がいる……
消去法でお悩み解決部、以上証明完了」

「なるほど、正直いってこれはわからん」

「こんなのが1位なんてズルでも使ったんじやな「勉強とこの訳のわ

からない問題とじゃ全然違う、そもそも情報量が致命的に少ない、ヒントがヒントになってない、情報を処理する仕事にいるから解けるがこれを一般の生徒に解かせるのは無理があるしハチ君は体を動かす仕事が多いから多分一分半はいると思う、これをクイズと呼んでいいのか迷う」なんですって！」

キーンコーンカーンコーン

あ、チャイムなった

「時間だぞ」

「……鍵は私が返しておくわ、さようなら」

最悪の部活初日は、こうして去っていった

……やめたいな

今日も比企谷家は平和である

八幡 side

チャリをこいでの帰り道、蒼が唐突に『今日泊まりたい』などと言った為両親に許可を得たらしいぞ、と返すと一旦チャリを止めて電話をしていた

「うん…うん……わかった！じゃあ今日ハチ君の家で泊まるね！」

……この調子だと泊まるっぽいので家に家族LONEにメッセージを書き込むことにした

今日蒼が泊まるってよ

(小町) お義姉ちゃんが来るの!?!
そうだぞ

(小町) お義姉ちゃんを誘うとは…お義兄ちゃん、小町的にポイント高い!
い!

いつも思うがそれ貯めて何か買えんの?

(小町) 別に?

(湊) ほう? 簀巻き吊り状態でスマホ弄るとはママブチ切れポイント高めだな?

(小町) 許してください

(湊) 誰が許すか。あとハチ、蒼ちゃんには着替えこっちで用意しておくって言っというて

へいへい

そろそろ切つとかなないとこっちに流れ弾が来そうだから「今から帰る」とだけ送り、蒼に声をかける

「着替えはこっちで用意するってよ、んじゃ行くか」

「はいー!」

チャリを飛ばし我が家へと帰る

「たでーまー」

「お邪魔しま…あゝ」

家に帰るなり小町が簀巻きにされた状態で廊下に吊るされていた。首には【私は罰執行中にも関わらずスマホを弄りました】と書かれたプレートがある

「おかえり…鬼いちちゃん、お義姉ちゃん……」

「誰が鬼いちちゃんだつての」

「ハチおかえりく、このバカはあと少ししてから下ろすから心配しないでいいよ」

「お母さんのそういう所小町的にポイントひく「あ?」「ごめんなさい!」

「たつくこのバカは……蒼ちゃん、軽くでいいからシャワー浴びなさいよ。浴びたらちよつと手伝って」

「わかりましたー!」

蒼がシャワールームへと入ると俺の方を向きクイックルワイパーを俺に押し付ける

「ハチはクイックルワイパー掛けて、上から下まで」

「はいよ」

簀巻きにされた小町は降ろされるらしいのでクイックルワイパーを上からかけ、牛乳を飲む

「ハチ君上がったよ」

飲んでいると降ろされた小町と蒼が部屋に来た

「あいよ」

「そういえばお義兄ちゃん、今日帰って来るの遅かったけどどうかしたの?」

「部活することになった」

「は?」

「部活することになった」

「……お義兄ちゃんが?まじで!」

おい、なんだその驚き方は

「お義姉ちゃんは知ってました!」

「あはは……私も入ってるんだ」

「ええ!」

「なに、ハチあんた部活入ることになったの？」

「人数合わせだけだな」

「……ああ〜」

「ん？」

なんか目に見えて義母さんと小町が落胆した表情になってるんだが……

「まあアンタが部活入るのならそうなんでしょうけどね……」

「はあくこれだからお義兄ちゃんは……」

「そんなに落胆するほどのことか？」

「落胆っていうかハチがまともな青春生活を過ごすんじゃないかと一瞬期待してたのよ」

「そりゃ悪かった。だがレイズに入ってる以上はそうなる事くらい何となくわかるだろう？」

「彩加ちゃんは例外、だったけ？」

タバコを吸いながら義母さんが尋ねてくるので「例外中の例外」とだけ返す

「あれ？戸塚さんってそんなに変わってるんですか？」

「変わってる……というか彩加は1人でオペしちやいけないんだよ」

「は？なんで？」

「説明は出来ないが彩加が例外中の例外だってことはわかつとけ、アイツが部活とレイズを両立出来るのはそれが大きいからな」

「ふーん……」

「そうそう、聞き忘れたけど2人は何部に入ったの？」

「奉仕部」

「なにそのいやらしい響きの部活」

「お母さん……」

なにやら小町が義母さんをドン引きした目で見ている

「……つと、まあ冗談はここまでにして、多分お悩み相談部的な感じでしょうっ。」

「まあそんな感じ」

「ビラと配ってるの？」

「平塚先生経由じゃねえかな……つかまだ同好会のレベルだし」

「人数的な意味で、ね」

「あーそっか、総武は部員3人＋教師1人で同好会、部員5人＋教師1人で部活だったけ？」

「てことは今は奉仕同好会？」

「ま、そうなる訳よ」

「あとアンタら以外の部員って誰よ」

「学年3位の雪ノ下雪乃だってよ」

「ほーん……雪ノ下か、この辺りの名士だね。県議会議員だっだけか」

「まじかよ……」

トンでも家系だな……

「トンデモだね」

「で、第一印象は？」

「最悪」

「え？なんで？」

「初対面でぬぼーつとしてるの呼ばわりされた」

「ハチ君をバカにしたり『脅して付き合ったんだろ』とか言われたし」

「まあ、後者に関してはアレよね。目が死んでる男と超絶美人が付き合ってたからそう思われても仕方ないわね」

「お義母さん!?ハチ君素敵じゃないですか!」

「いやそれは長年付き合ってる蒼ちゃんや私らだから言えるわけで初対面だとそう思われてもしょうがないわよ」

「ま、そうだな」

はつきり言ってそれは否定しない、そう思われるから付き合ってるって言っていないだ

「あとはクイズにならないクイズで蒼が答えたら『お前学年1位なのになんで答えらんねえの？ズルしたの？』みたいなこと言われた」

「そのクイズって？」

「ここは何部でしょう?」

「わかるか!」

小町と義母さんが怒鳴る

「たつく、あんたらも仲良くして欲しいとは思うけど……ムズいかもね」
義母さんが溜息をつき、蒼と義母さんが飯が出てくる時に義父さん
も帰ってきた

「ういーつす、たでーま。蒼ちゃんは来てるのか」

「今日は泊まっていきます」

「ハイよ」

飯を食いながら義母さん達に話した内容を義父さんにも話すと

「まあ、うん……その、ガンバレ」

と同情した眼差しで見られた。まあ、そうなるよな……

戦働蒼は比企谷八幡との出会いを思い返す

蒼side

「さて、引越したからには心機一転頑張るぞ！」

「おー！」

「はいはい、とりあえず荷物ね〜」

お父さんがお仕事の都合？でお引越したからお友達と離れ離れになっちやったよ

……新しいお友達、できるかな…

「何言ってるのよ、蒼なら友達出来る！」

お母さんはそう言ってたけど……わかんない、自信が無いな…

「そうだ！お隣さんのお家に行ってお友達をつくろう！」

「！」

うん！と元気よく言ってお母さんと一緒にお隣の……えつと…

「比企谷ね、間違えても比企谷なんて呼んじやダメよ。すつごく失礼だからね？」

「はーい！」

ピンポーン！

ガチャリと音がして赤っぽいピンク色の髪をした女の人が出てきた

「はーい、比企谷です」

「あ、初めまして」

「はじめまして！」

「あー……お隣に引越してきた」

「はい、戦働と申します。よろしくお願ひします」

「よろしくおねがいします！」

「よろしくお願ひします」

比企谷さんと挨拶をしてお母さんが「つまらないものですが」っていってお菓子を渡したら比企谷さんが2階の方に何か言った

「ハチ〜！降りてきなさい！」

「はーい……」

少しして男の子……比企谷くんの子供かな？

そんな感じの子が玄関まで来ました

「ほら、挨拶しなさい」

「ひきがやはちまんです、よろしくお願いします」

「……」

「八幡くんね、私は戦働千鶴センドウチズル、千鶴さんって呼んでね♪」

「は、はい……」

「ほら、蒼も挨拶しなさい。……蒼？」

私はお母さんの言葉も聞こえずにひきがやはちまんくんを見ていた……ちゃんと理由はある

『か、かっこいい……／＼／』

はちまんくんがすつごくかっこいいから！

かっこよくて本当にかっこよくて、お話も出来ない程に見とれてしまった……

「蒼……？」

「はっ……！」

い、いけない！お母さんの声で意識がこつちに戻ってきて、慌ててしまう。はちまんくんに何か言わなきゃ！そう焦り、とんでもないことを言ってしまった

「せ、せんだうあおです！よつよよろしくおねいします！わ、私と付き合って下さい!!!」

「……はっ……」

「……あ／＼／」

か、顔が真っ赤になった私に対してはちまんくんが凄く困惑した声でこう返してきました

「っ、付き合うって……まだあったばかりだよ？」

「そ、そうだよね！ごめんね！」

「……戦働さん、娘さんハチに惚れてるらしいんですけど……」

「子供の恋愛です、精一杯応援したいと思います」

「そういう事だけどうじゃないんですよ。あの、うちの息子なんてかわからないですが目が……その」

「変わった目をしてますね。ですが問題はありますか？」

「……其方は大丈夫そうですね。なら私も精一杯応援しましょう」

「なんかお母さん達が話してるけど聞こえないや！」

「私ははちまんくんの肩を掴んで顔を寄せて尋ねる

「はちまんくん！ハチくんって呼んでいい!？」

「ち、ちかいよ！いいよ、いいよ！」

「やったあ！」

「凄く嬉しくなつて、益々付き合いたいっ！って思っちゃった！」

「これからがんば——」

「……はっ！」

ガバツと私は起き上がる

「ぐう……すやあ……すぴい……」

隣では小町ちゃんが居て、今日私はハチ君の家に泊まりに来てゲームしてたら寝落ちしちゃってた、という事を思い出した。そして私はさっきまでの夢を思い返していた

「……あの時はハチ君と全然話せてなかったなあ……ふふふっ♪」

あの時はホントに近くに居るだけでガチガチに緊張しちゃって、ハチ君って呼ぼうとしても声が全然出なかったっけ

それなのに毎日ハチ君家に遊びに行つて付き合つて！って言うってたんだよね♪

「懐かしいな……」

先に小学校に入る時なんか『ハチ君と一緒に入学するの〜!』って泣き喚いたなあ……

「……無性に卒アルが見たくなった。借りよ」

小町ちゃんの部屋にはハチ君の卒業証書やらが置かれていてどうやらハチ君から譲つて貰えたらしい

……小町ちゃんもブラコンなんだなあ……なんて思いつつも小学校の卒業アルバムを引き出して昔の思い出を思い返しちやった……♪

比企谷八幡はオペをする

八幡 side

朝5時半頃…

トゥルルルル…トゥルルルル…

「んだよ……」

スマホから流れる電話呼び出し音で目を覚ましてしまった俺は呼び出した主に対して通話ボタンを押して抗議する

「今何時だかわかってますか？」

『わり、寝てたんなら謝る。オペの依頼が来た』

「風間さんが出ればいいんじゃないですか？」

『俺も空いてない、それに進行が進んでるから他の奴にも任せられない』

「……はあ……」

めんどくせえ……内心そう思ったが最古参の風間さんに頼まれれば断ることは出来ず、とりあえずリビングテーブルに『仕事が入った』とだけ書いておいて家から出ようとする

「ふああ……あ、ハチ君おはよお……」

蒼が降りてくる

「仕事？」

「まあな……んじゃ行ってくる」

「行ってらっしゃい……」

リビングに行った蒼に行ってくるとだけ言った俺はバイクでレイズへと向かう

ふう……俺らの部屋でコーヒーを飲み、病室へと向かおうとするとゆ花家ユウが部屋へと入ってくる

「比企谷先輩、おはようございます」

「花家か、おはよう」

「…仕事、ですか？」

「風間さんに頼まれてな」

「…：頑張って下さい、必要ならバンバンシユーディング貸しますよ？」

「借りても俺使えないから…：気持ちだけ受け取っておくよ」

「わかりました、では私もオペに行ってきます」

「おう、行ったら」

そう言つて改めて病室へと向かうと患者と思われる男性が目を丸くした

「ドクターの比企谷八幡です」

「…：は？はあ!?!お前が!?!」

「はい」

ベッドとなつている担架を手術室に運ぶ俺に対して患者は文句を言ってくる

やれ『高い金払ったのに詐欺だ』やれ『クソガキに治療されるなら死んだ方がマシだ』だの

…：言いたいことはわかる。だが一応こちらも実績持ちで患者であるアンタのゲーム病の進行度合いから俺が抜擢されたのだから文句を言われる筋合いは無いと思つている

「とりあえず着きました、これよりオペを開始します」

「だからお前じゃなくて——ぐ、あが…：…！」

STAGE SELECT!

高校生である俺がオペをするというストレスで活性化した為俺のせいであるが…：これ以上ゲーム病が進行するのは不味い、患者の命にも関わる

そう思い即座に腕についてる特殊フィールド生成機を起動し、バグスターウイルスの活性化をある程度まで押し留める

今回のフィールドは結婚式場前でユニオンバグスターは剣の形をした物でユニオンバグスターは俺に対して斬りかかってきたので俺は即座に回避しタドルクエストガシャットを起動する

TADDLE QUEST!

「展開！」

ホルダーにガシヤットを入れて即座に装甲が装着されガシヤコンソードが攻撃してくるユニオンバグスターを弾き俺の手に握られる
「さて……どう動くか」

剣の切っ先は俺の方を向けられており、剣がこちらへと突っ込んでくる

「なるほど……！」

ガシヤコンソードのBボタンを3回連打し、ガシヤコンソードを斬りあげる

「ラアッ！」

火炎と衝撃波によりバグスターウイルスが焼かれ、消滅していく

しかし元々患者の中にいたバグスターウイルスが多かった為に焼ききれず、ガシヤコンソードを斬り裂く

「キメワザで……ん？」

……いい物があった

俺は近くにあるメダルのようなものを触れる

マッスル化！

触れたそれ……エナジーアイテムは一瞬大きくなったかと思うと俺の中に吸収される

すると俺の身体に力が溢れ、ガシヤコンソードも強く熱と光を放つ
「よっし……決めるか！」

結婚式場の壁を蹴り上げ、空中に飛ぶ

ユニオンバグスターは俺の方へとまたも突っ込んでくる

「……これでフィニッシュだ！」

ガシヤット！キメワザ！

TADDLE CRITICAL FINISH!

火炎を纏ったガシヤコンソードをすれ違いざまに斬り裂き、着地する。無論患者を抱き抱えていて、床に下ろす

「……よし、問題は……」

バグスターウイルスは完全に消えることなく、バラバラになったバグスターウイルスは1つの集合体になる

更に残ったバグスターウイルスも魔法使っぽい杖を持ったバグスター戦闘員になる

「……お前は」

「……ユニオンバグスターとしての私は失敗したか、だが問題ない！
そのの戦士を始末し、私は完全になる！」

「……そうか」

「まずは貴様を倒す！喰らえ！モエー——」

「せやあ！」

「ぐぼお!」

目の前にいるバグスター……アランプラは杖を構えるが背後からの銀髪の少年……彩加の膝蹴りが入り退ける

「よつと……八幡ごめんね！遅れちゃった！」

「大丈夫だ。彩加、今回はどつちを使うんだ？」

「こつちかな……展開！」

BAKUSOU BIKE!

彩加が爆走バイクガシヤットを起動すると何処からとも無く黄色いバイクが現れる

そしてガシヤットを腕のホルダーに入れるとバイクが分解され、タイヤが2つになり足に装着される

黄色い軽装甲が装着される。更に右手首にチェーンソーとビーム砲が一体化した武器「ガシヤコンチェーンガン」が装着される

「よし、八幡！一緒に！」

「ああ！」

「ノリノリでクリアしてあげる／やるぜ！」

比企谷八幡はオペをする (2)

八幡 side

「ええい喰らえ！モエール！」

1度目の魔法を妨害されたが為か怒りが入り交じったモエールの声と共に杖から魔法陣が現れ、火球が何発も発射される

「ならっ……い！」

コ・チーン！

ガシャコンソードのボタンを押すとガシャコンソードの刀身の色
が変化、赤から水色に変化し氷属性になる

「ゼアー！」

俺と彩加へと迫る火球をなぎ払い、更にこちらへと来るバグスター
戦闘員を対処するべく地面にガシャコンソードを突き刺す

すると俺を中心として周囲の地面が凍りつき、バグスター戦闘員も
全身が氷漬けになる

「彩加！」

「うん！」

バ・キューーン！

ガシャットチェインガンの銃口を前に回転させると爆走バイクガ
シャットを装填する

ガシャット！キメワザ！

BACKUSOU CRITICAL FINISH！

彩加がガシャコンチェインガンを構えるとガトリングの様にガ
シャコンチェインガンが連射され、氷漬けにされたバグスター戦闘員
を破壊していく、その反動のせいか彩加は最後辺り若干振り回されて
いた気もしたが無事に撃ち切り、あつという間に自身の兵士を失って
呆然としていたアランブラに向けて全力で斬りつける

「ぐぼあっ!?お、おの、がはあ?!」

「悪いな、これも仕事なんだ……らあよ！」

ガシャコンソードで連続で斬りつけ、トドメに顔面に拳をぶち込む
「があーお、おのれえ！シビレー——」

「やらせないよ！」

ギャ・イーン！

「あがががが!？」

「ふみゆうう……せいつ！」

「があっ！」

彩加が腹からガシャコンチェーンガンで斬り裂き、アラランブラはもうフラフラになっている

「これで終いだ！」

ガシャット！キメワザ！

TADDLE CRITICAL FINISH!

まずは足を地面に刺したガシャコンソードで氷漬けにする

「な、う、動けん！これを消せエエ！」

「ああ、消してやるよ……お前ごとな！」

カ・チーン！

ガシャコンソードを炎属性にし、炎によつて延長された刀身でアラランブラを肩から腰まで斬り裂く

「が……お、おのれ……！ぐあああああああつ！！！！」

大爆発を起こし、アラランブラは撃破された

GAME CLEAR!

「よっし！」

お互いにハイタッチ、いつも通り患者を俺が運び、彩加が報告書を書いた

八幡side end

三人称side

八幡と彩加、そして患者しか居ないはずの特殊フィールド、しかしもう1人、フィールドに人間がいた

その男は八幡達が立ち去ったあともフィールド内におり、何かを書いていた

『比企谷八幡 使用ガシヤット タドルクエスト

戸塚彩加 使用ガシヤット 爆走バイク

備考 戸塚彩加は何かを隠してる可能性あり』と……

男はそう書くと書いた紙をポケットしまい、先程まで八幡達が戦っていた場所を見る

「今は財団Xの雇われ人だけど……そうじゃなくなったら面白そうだなあ……比企谷八幡、戸塚彩加……覚えておこう……クククク……アツハハハハ!!!」

楽しそうに笑い、財団Xの雇われ人らしいその男はフィールドから立ち去った

比企谷八幡は戦働蒼と食事をし、相談に乗る

蒼 side

どうもこんにちは、戦働蒼です。

昨日、ハチ君がオペで学校で休みだったので私と雪ノ下さんとで奉仕部に居たのですが由比ヶ浜ちゃんが奉仕部に来たのです

由比ヶ浜さんはハチ君が入学式の日に事故を起こした原因の一つでペットのリードが緩んでいたのかりードが外れて車がいる中突っ込んでいったらしいのですがジョギングをしていたハチ君が犬を助けたらしいです。今ではハチ君とはちゃんと謝り、時たま電話するくらい仲らしい……ですが由比ヶ浜ちゃんがハチ君に惚れてる気がするのは気の所為でしょうか？

そんな由比ヶ浜ちゃんが来たのはとある人物——まあハチ君だろうけど——にお礼として手作りクッキーを渡したいらしいので手伝って欲しい、との事でした

家庭科室を借り、クッキー作りを始めたのですが致命的な欠陥が発覚しました。由比ヶ浜ちゃんは大変メシマズらしいです

クッキーとは名ばかりの物体Xを口にくわえた時は言葉に出来ない味具体的には甘い、しょっぱい、苦いが交互に来る感じに悶絶してしまいました。どうにかマニュアルを読めと私と雪ノ下さんの2人がかりで教え、どうにか人並みの味にしました

そして帰った頃にはハチ君も自宅へと戻っていたらしく、遊びに行った時にはハイライトが消えていました……完全体バグスターとでも出会ったかのような目でした。大変だったんだね

そして本日、ハチ君と食事をとろうとF組に行くと、由比ヶ浜ちゃんが、金髪縦ロールな髪型の子……たしか三浦優美子さん（だったっけ？）に何かしら文句を言われている

周りが別室に避難している中如何にもな優等生……たしか名前は

：葉山隼人君が三浦さんを宥めている中、ハチ君はどうでも良きげにそれを観察していたが私を見つけて、スツと立ち上がり私の所にきて「昼飯にするか」と言われた為離れた、その後雪ノ下さんが三浦さんと口喧嘩でポロポロに言い負かし、三浦さんを半泣きにさせたらしいが私達には間違いなく関係のない話だろう

いつもの昼食スポットで食事をしていると、テニスコートから練習を終えたであろう彩加君が来た

「おーい！彩加君ー！」

私が手を振ると彩加君も手を振り、こちらへと来る

「八幡、蒼さん、どうしたの？」

「俺達は昼飯だ。彩加はテニスの練習だろ？今度時間が空いたらそっち手伝うぞ」

「ありがとー！……僕は、部活にもっと力を入れた方がいいと思います！」

「総武は部活より学問だろ？かなり難易度高いと思うぞ。例えるなら超高難易度リズムゲーのベリーハードをノーミスでクリアするくらい」

「流石に言いすぎて……無いなあ、GWとか全然練習してないから習い事だし」

彩加君の言う通り総武の部活は大会に出れば満足ってレベルでかなり弱小なのです。

大会で1勝をとることすらかなりレベルが高いでしょう

「どうすんだよ。各々の戦闘力を高めるしかないだろうけどさ」

「単純に部活を強くしたいなら部活全体に昼も強制練習させればいいんじゃない？」

「多分それをしたらよけいにモチベーションが下がるよ……」

「じゃあどうするの？モチベーション考えたらいくら案だしても無意味な気が……」

「とういか……これ考えんの何百回目だ？何千？」

「さ、さあ……あ、八幡今日休みでしょ？」

「レイズはな……奉仕部があるが」

また雪ノ下さんがハチ君を罵倒される可能性があると考えると滅入ってくるが平塚先生の頼みだ。無下には出来ない

「あはは……技術課から来て欲しいって」

「材木座か？…確か今新しいガシヤットと特殊なガシヤコンウエポンの開発をしていたからそのガシヤットとガシヤコンウエポンの性能テストか？」

「……大変だね、八幡の今日の予定は？」

「部活と実験」

キーンコンカーンコン

「昼休みも終わったか……蒼、帰ったら家で待っていてくれ」

「りょーかい！あ、どんなのだったか教えてね？」

「へーへー」

「じゃあ蒼さん、明後日、放課後に奉仕部？に行くから案内宜しくね？
八幡、新作ガシヤットの实验頑張ってるね！」

「了解！」

「おう」

材木座義輝は色々作る

八幡 side

いつの間にか由比ヶ浜が増えていて、依頼人が来なかった部活を終え、俺はレイズの技術課へと向かう
「うっす」

軽い挨拶と共に俺は材木座の部屋へと入る

「来るのが遅いぞ八幡！」

「部活だっつったろが」

「え？マジで部活入ってるの？」

「なんだその反応……入ってるよ」

何故か驚く材木座にそう返し、椅子に腰掛ける

「んで、ガシヤットと特殊なガシヤコンウエポンの開発に成功したのか？」

「まだプロトタイプだがな……これだ」

そう言って材木座が出したものは……んん？

「……ん？これって彩加のアレと似てないか？」

「ガシヤコンチェーンガンをモデルにしてるからな、ガシヤコンバグヴアイザーだ！」

「ぶつちやけガシヤット装填口が増えた以外リデコしたようにしか見えねえ」

「ぐぶっ!？」

リデコと返すと材木座は怯む……え、まじでリデコなの？

「まじかよお前……」

「い、いや違うぞ八幡！アイデアが思いつかなかったとか手頃なサイズのガシヤコンウエポンがガシヤコンチェーンガンだとかそんなことは無いからな!？」

「答え言ってるじゃねえかよ……」

「がはあ!？」

……うん、もうノックアウトだなコレ

とりあえずガシヤコンウエポンを受け取ると材木座はガシヤット

を取り出す

「とりあえず八幡のガシヤットは『DLMF BEAT』だ。コンボを決めると強くなるリズムゲームだと思えばいい」

「……ほーん」

太鼓の○人みたいなゲームだな

「サンクス、これ受け取るわ」

「それじゃあトレーニングルームに向かってくれ、説明はその時にする」

「ういうい」

トレーニングルームへと向かいガシヤットを起動、軽装甲を纏った俺の前に出る

『……マイクテスマイクテス：八幡、聞こえるか？』

「聞こえるよ、んで。とりあえずガシヤコンバグヴァイザーはどうすりゃいいんだ？」

『バグスターブレスが腕に巻けるだろう？それにつける感じだ』
「なるほど」

バグスターブレスが腕に巻かれ、そこにバグヴァイザーを付ける

チュ・ドーン！

『八幡、バグヴァイザーはモードチェンジする時は回転ではなく1回外してから……という感じだ』

「説明力がアレ過ぎるが言いたいことはわかった」

バグヴァイザーを外し、チェーンソー部分を前面にして嵌める

ギユ・イーン！

チェーンソーモードにすると同時に刃が前面に出て斬れ味が増強する

「ほー……まあこっちに戻すが」

チュ・ドーン！

ビームガンモードだと刃は引っ込む感じか…

「……よし」

ビームガンを構え、的に向けて放つ

「……ヒット」

物理演算に左右されないバグヴァイザーの光弾は真つ直ぐ飛び的を貫く

『どうだ?』

「いいな、これ……」

下手な物理演算をしなくていいのは本当にありがたい、光弾を使う武器はかなり良いと思うが2つ銃口が付き、腕に装着するタイプのこれは今までテストした中で最高と言っても過言ではない

『そこまで気に入ったか?』

「最高だ、コイツは良い……」

かなり気に入った俺はチェンソーモードにし、的を連続で斬る

「ふうむ……」

リーチがない分より接近しなきゃならない感じか……インファイターな俺にや関係ないがこれを使うのは余程相手の装甲が硬い時だけだな

『どうだ?』

「アレだ、相手の装甲が硬い時に使う感じだ。普通の相手ならガシヤコンソードで十分過ぎる」

『そうか……貴重な意見だな。次にそのガシヤットの使い方だが……そのガシヤットは普通に使ったらダメだ』

「と、言いますと?」

『そのガシヤットと八幡の適性は79%程だ』

「ちよつと待て、俺使えねーぞそれ」

『まあ待て、そのガシヤットはバグヴァイザーを使うことによってはバグヴァイザー使用中はバグスターウイルスが使い手の最も適性値が高いバグスターウイルスに変換される』

「あー……なるほどね」

適性が高いやつに変換されるか……

「そーゆーことね……んじや、やりますか」

俺はガシヤットを構え、起動する

D L M F B E A T !

するとゲーム画面が俺の背後に現れ、DJみたいなロボットが出て

くる

「……………これは？」

『ビートゲームだ。それが装着される』

「……………なるほど。よし、やるか」

『やるってどうやって』

「使い方はおおよそわかった」

俺はバグヴァイザーにガシヤットを入れる

ガシヤット！

そうしてガシヤット挿入口の反対側に付いているボタンを起動する

バグルアップ……………！

するとビートゲームが俺に近寄り、分解される

ド・ド・ドレミファソラシド！

OK!DLMF BEAT!

左腕にスピーカー型の装甲が、右腕にはバグヴァイザーの下にターナーブル型の装甲が装着される

更に両足、胸部にも黄色い専用であろう装甲が纏われる

「おー……………なるほど、これはいい」

『違和感とかは？』

「ないぞ、ちゃんと身体にフィットしている」

よし……………ターナーブルを起動させ、リズムに合わせ窓を斬っていく、リズムに合わせる度身体に力が増し、より素早く斬ることが出来る

更にスピーカーから音符型のエネルギー弾が放たれ、的を破壊する
ある程度使い、展開を解除し材木座の部屋に入る

「……………なるほどね、さすがだ。コイツは完成品を待ってるのが勿体ねえ」

「ほ、本当か!？」

「まあちゃんとしたのを待ってるぞ」

「任せろ！」

おおっと、ガチでパソコンに向かい合った。こうなった材木座はす

げえからな……期待するか

戸塚彩加は特訓をし、三浦優美子は話がわかる

3人称 side

材木座の新型ガシヤットを八幡がテストしてから4日後の昼休みのテニスコートでは、特訓の内容を考えている比企谷八幡と、それをギロリと睨む雪ノ下雪乃、テニスコートで打ち合いをしている由比ヶ浜結衣と戸塚彩加、腕立て伏せをしている戦働蒼がいた

こうなった理由は……

3日前

彩加からテニス部を強くして欲しいという依頼が来て、蒼が「彩加君のテニス特訓の内容決めるから手伝って〜!」と言われ風間と交渉した結果休暇が手に入り、奉仕部へ向かうと、あーでもないこーでもないとうんうん悩ませている雪乃と結衣がいた

「お前ら彩加の特訓の内容をきめるのか?」

と質問すると鋭い目付きで雪乃は睨みつけ「サボりは黙ってなさい」と言い、言われた八幡は半ば呆れ気味に呟くと雪乃は噛み付く「どうせ死ぬまで走らせて死ぬまで素振り、死ぬまで練習とか言ってるんだろ、効率が悪い。俺が考える」

「サボってた癖に偉そうに言わないで! だいたい彩加なんて馴れ馴れしくい関係でも無いでしょう!」

「はあ……バイトしているって平塚先生が言ってたろうが、彩加とは中学の頃から仲良かったぞ」

「だから? 貴方がまともな内容を決められるとでも?」

「死ぬまで特訓とか考えるやつに比べればましなものが作れるぞ」

「なら交代で特訓内容を決めてそれに戸塚君をさせて、どっちがいいか決めてもらいましょう!」

「ぶっちゃけどうでもいい……」

……このような感じで彩加を巻き込んだ決闘が決まり

生徒会に許可をとった次の日、雪乃の特訓が始まった

……言わずもがな内容は死ぬまで特訓で雪乃には「これは他の部員にやらせるのはキツイよ」と言い、その後八幡に「こんなのを他の人にやらせたら退部者が増えて部活存続も危うくなるよ……」とボヤいたそう

結衣は途中から蒼と共に筋トレやらをして楽しんでいたらしい

後日

八幡の特訓の日で内容は

『軽い準備運動（最初のみ）

コートランニング5週

素振り200回

ストレッチ

腕立て伏せ30回

腹筋30回

軽い休憩（どれだけ長くても10分程度）

コレを出来る限り繰り返し

普段からそこそこ鍛えている彩加にとってはちよつと難しいくらいで疲れはしても苦にはならず、2週半（1回してからストレッチまで）出来て「疲れたけど良かったよ！」と言って雪乃の顔が真っ赤になっていた

そして現在

軽い準備運動を終え、実践的な事をする為にコートと結衣を使い練習をしていた

八幡はなんで雪乃が奉仕部にいるのかを聞き、呆れ返った

曰く「過去に嫉妬で虐めにあつた」曰く「人は完璧ではないから、優れた人ほど生きづらい」曰く「そんなのはおかしい。だから世界ほど変える」

八幡はなんで自信満々にそんなことを言えるのか聞きたくなくなった

優秀な人間は生きづらい？優秀でなくとも生きづらい。弱者を狙う虐め、家庭内暴力、セクハラパワハラ、優秀な人間のみが生きづら

いのではない……優秀ならば普通の存在を見て助けるべきであろう……そう思った八幡は

「どうして部室に籠もり過ごしていて世界を変えられると思う」

と訪ねた、すると雪乃は

「本当に救いを求めている人が来ればいいのよ、それに部活だけじゃないわ、私今度レイズに入隊するの。特殊医療課にね……。そうすればバグスターウイルスがなくなって世界改革の足がかりになるでしょう？」

と答えた。八幡は適正があつたのか？と聞くすると

「90%。入隊するには充分でしょう？体力には自信はないけれど技術でトップになるわよ、もつともあなたじゃ、入隊することすら危うでしょうけど、あ、由比ヶ浜さん！もつと左へ！」

八幡はなんでで浮かれているんだと思った。八幡自身も97%で彩加、蒼、ユウもバグスターウイルスには適正率95%以上であり、体力がないことはオペにおいて致命的であり多く動くバグスターウイルス切除手術ではかなりの体力を要求される。なければ邪魔者にならない

というか雪乃は新人研修で潰れるのではと内心思っていた

「……ガンバレ」

八幡は呆れ9割の応援をすると

「あなた如きにいわれなくても余裕よ」

その言葉のため息をつき八幡は彩加達の方をみる。

結衣は彩加が放つ高速の球を捌いていたが、コテンと転び、足を擦りむいた

それを見た雪乃はどこかへと行き、彩加はその後八幡と撃ち合い（文字通り弾丸並の速度で放たれる為撃ち合いである）をしていると

「あ、テニスやってんじゃんテニス！」

三浦と葉山、そして葉山グループが来た

「ねー戸塚ー。あーしらもここで遊んでいい？」

「ごめん、今日は僕達自主練中だから遊ぶのはダメだと思う、別の日に生徒会に頼んで許可が降りたら大丈夫だろうけど」

「（自主練中だったの？……流石に悪いことしたな）あー、ごめん、別の日っていつが空いてる？……ってあれ？アイツらは？」

「自主練の手伝い。あ、許可はとってるよ、コートは明日とか来週の火曜とかが大丈夫だと思う」

「そう、それじゃ明日、出来ればあーしと一緒に試合しよう？」

「三浦さん強いんだよね！喜んで！」

「そ。じゃあ隼人、行くよ」

優美子は葉山と共に去る、何故が葉山は彩加に向けて恨めしそうな視線を向けていたが八幡には理解が出来なかった

結局、（一方的な）勝負は当然八幡の圧勝に終わり、雪乃は殺意を含んだ視線を向けていて、結衣は昔のお礼にとクツ^物キ^体ーを渡し、八幡の顔が青ざめた

戦働蒼達は迎え、戦闘へとなる

蒼side

テニス部騒動が起きた数日後、レイズ アメリカ支部から1人こちらに来るとの連絡があり今日はその人を迎える事になった

「あの……戦働先輩」

「なに？」

「その、アメリカから来る人、女性らしいですよ」

「へー……」

「しかも美人さんらしいです」

「ふーん」

対して興味無いなあ……私ハチ君一筋だし

「比企谷先輩に憧れてきたんじゃないですか？なんならこくは——」

ゴスツ

「ごふっ」

「なんか言った？」

「ナンデモナイデス」

「よろしい」

腹に肘を入れ、後輩を黙らせ、アメリカから来るその人が来るのを待っている

そして特殊犯罪専門課にSPと共にその人が来た

ブロンド色のロングヘア、赤い瞳でかなりの美人……モテるんだろうな、なんて思っているとその人物がSPを元の場所に帰し、自己紹介を始める

「は、初めまして、ワタシはアメリカ支部が来まシタ、リサ・ウエルデネス。よろしくお願ひシマス」

ウエルデンさんか……彼女は一体どんなライダーウエポンを使うのだろうか。個人的にそこが気になっていたが彼女はバックルを取

り出す

「ワタシのライダーウエポンはコレです」

「はい?」

「より正確に言うナラ……コレも入ります」

ウエルデンさんがそう言うのとドリル型の武器が召喚される

「なるほど……」

私が納得すると彼女は私の方を向き、こう言ってきた

「戦働蒼サン、デスよね?」

「はい」

「1回戦っているくれませんか?」

「……いいですよ」

少し考え、受諾するとウエルデンさんは喜び「10分後にやりま
シヨウ!」と言ってきたので、準備をする

「戦働先輩、頑張ってください!」

「わかってるよ、負けるつもりなんてない!」

後輩ちゃんとそんな会話をしていると照井先輩が来てガイアメモ
リを私に投げてくる

「戦働、技術課からだ」

「わっ……!」

黄色の月の形をした……多分、Lのガイアメモリを受け取り、お礼
を言うてから私はバトルフィールドに入る

「戦働先輩!楽しみまシヨウ!」

「ええ」

「サ ……

Shall we start the experiment」

そういうとバックルを腰に巻き、2つのボトルをバックルに入れ、
私もトリガーメモリを起動する

RABBIT! THANK!

Are you ready?

TRIGGER!

レバーを回したウエルデンさんとトリガーメモリを腕時計型メモ

リガジェット——スパイダーシヨックに入れた私の言葉は同時に放たれる

「展開！」

R A B B I T T A N K !

その音声とともにウエルデンさんの周囲に赤と青の装甲が現れ、装甲が装着され、ドリル型の武器が握られる

同時に私の装甲も装着され、トリガーマグナムを握る

「試合——」

「——開始！」

トリガーマグナムを構えると同時にウエルデンさんは右足で強く踏み込む

「ッ——！」

瞬間、私の視界いっぱいウエルデンさんの右膝が映り、咄嗟に両腕をクロスして防ぐが強い衝撃で身体が後ろに吹っ飛ばされる

「くっ……い！」

着地した私の背後に既にウエルデンが居て、ドリル型の武器で斬り掛かる

「それでも、喰らえッ！」

トリガーマグナムでドリル型の武器を弾き、即座に構え何発か弾丸を放つ

「ぐあっ!？」

当たっている箇所の問題があるのかぶっ飛ばされることは無く、ウエルデンさんは右腕をコチラに向ける

「なにを……ッ!？」

瞬間、ウエルデンさんの右腕に青い砲が装着される

私は条件反射のようにトリガーマメモリをスパイダーシヨックから抜き、トリガーマグナムに挿入、マグナムモードにして構えるが——当然、遅すぎた

ドガアアアアアアン!!!!

「きゃあああああつ!?」

だいぶ加減されていたとはいえ、砲弾を直で喰らった私は大ダメージを受け、吹っ飛ばされる

しかし、まだ立てる。両膝が少しガクガクしているがこんな誤差でもない……

「……勝負アリ、デスヨネ? ナゼ、立つのですか?」

「まだ勝負が終わってないから、だよ……。まだ、ね……!」

私は先程受け取ったガイアメモリを起動する

LUNA!

ルナ……幻想の記憶を持つガイアメモリ、同時にトリガーマグナムに入っているトリガーマメモリがルナメモリに共鳴するように光始めた

「……展開!」

スパイダーシヨックにルナメモリを入れる

するとトリガーマグナムからトリガーマメモリが抜かれ、腰のスロットに入る

LUNA! TRIGGER!

すると空中に黄色の装甲が現れ、私に次々と装着される

装甲が纏われると先程までのダメージが体から抜けるようになくなり、何故か身体が柔らかくなった気さえもする

「……そんな、力があるんデスカ?」

「私も初めて知ったけどね……。さて、第2ラウンド、始めますか」

「そうしまシヨウ!」

お互いの武器を構え、第2ラウンドが始まった

戦働蒼は新たな力で挑む

三人称 side

ルナトリガーという新たな姿になった蒼とラビットタンク状態のリスア、2人は同時に飛び上がり膝蹴りをお互いに放ち、衝突する

「くっ……!」

「うあっ……!」

しかしルナトリガーになってもタンクハーフボディにより威力強化が成された蹴りには及ばず、ダメージは蒼の方が大きい

衝撃により蒼は吹き飛ばされ地面を転がりつつもトリガーマグナムを構え放つ

着地後すぐにリスアは視界いっぱいに映るのは青と黄の光弾、しかし焦ることなく左足で大きく踏み込み後ろへと跳躍する。普通ならば幾らも飛べないだろうが左足装甲内部に搭載された特殊強化バネ…「ホップスプリンガー」により大きく跳躍し光弾を回避した……筈が、光弾は地面に着弾する前に大きく軌道が変化、リスアを追尾し始める

「自動追尾システム……!?!」

「避けてみなさい、避けられるならば!」

そう言い蒼もまた跳び、リスアとの接近戦をする

光弾は蒼は避け、リスアのみを攻撃する。それを利用しリスアは上手く回避しているが回避には限界があり、またそちらの回避に集中していたが為に蒼の蹴りをモロに喰らったリスアは大きく後退、更に光弾が追い討ちの様に複数発命中する

「ナルホド……厄介な特性を持っていマスネ……!」

リスアはルナトリガーの能力をモロに喰らい、片膝をつく

「……なら、こちらも、行かせてもらいまショウ!」

タンクフルボトルを抜いたりリスアは灰色のフルボトルを入れ、レバーを回転させる

G A T L I N G !

青の装甲が消え、代わりに灰色の装甲が装着され、鳥のような意匠が取り入れられた機関銃のような武器が召喚される

「2つ目のライダーウエポン!？」

「私は現状10本のボトルの力を引き出せマス……あと2つライダーウエポンはありマスヨ?」

「人間武器庫……」

「失礼デスネ!」

プンスコと怒るリサだがドリル型の武器……ドリルクラッシュヤーのドリル部分を抜き、先程まで切った部分を差し込み銃モードにすると即座にレバーを回転させ、決めにかかる

それを見た蒼もまたトリガーマモリを腰のスロットから抜き、トリガーマグナムに装填する

TRIGGER! MAXIMUM DRIVE!

銃口に蒼と黄のエネルギーが集まると同時にレバーを回転し終えたりサは跳躍し上空から乱射する

Ready Go!

ボルテックアタック!

迎え撃つように蒼も地上から光弾を連射する

「トリガー……フル……バーストツ!!」

弾丸同士が命中しとちらも1発たりともお互いに命中せず、撃ち切る時にはお互いの武器がオーバーヒートを起こしており、辺りは弾丸でめちゃくちゃになっていた

「はあ……はあ……」

「……互角……デスネ……」

お互いに体力が限界に近付いており、同時に倒れ、試合は終了した

コイツらはイチャつく時はイチャつく 前編

蒼side

『小町が今日泊まって欲しいらしいけど大丈夫か?』

「うん♪まあ私は家の許可は居るけどね」

アメリカ支部から来たヴェルデンさんを迎え、皆が解散すると私もホンダ・CBR1000RRハードボイルダーのベース車に跨り、自宅に一旦帰り、ハチ君家に泊まる許可を貰ってから出発……と、お母さんが呼び止めてきた

「なあに?」

「私も行っていい?あの人も来也さんと話したいって言ってたし私も湊さんとお話したいし」

「あー……良いんじゃないかな、湊姉さんの許可いるけどね」

「当たり前よね」

私達が隣のハチ君のお家に行くと湊さんが少し驚いてたけど……まあ当然だよ

「あら、千鶴さん達もコッチで泊まるの?」

「ダメでした?」

「いえいえ、寧ろ食事を一緒に作ってくれる人が増えるから」

「そう言うと思って鍋必要食材一式持ってきましたよ♪」

「じゃあ今日は鍋ね、千鶴さん、作りましょうか」

「はい!」

お母さん達がキッチンに向かい、料理を始めると遅れてハチ君が家に帰ってきた

「義母さん、これ頼まれてた……って居ねえじゃん。って蒼、もう来たのか」

「バイクで行けば早く帰れるよ?」

「あー……確かにな」

「あと湊姉さんならキッチンでお母さんと一緒に料理してるよ」

「あ、千鶴さんも来てたのか」

「うん♪」

ハチ君が湊姉さんに食材を渡すところつちに戻ってきた

「小町ちゃんは？」

「ダチと買い物だつてき、メシまでには帰ってくるって」

「そうなんだ」

小町ちゃんともお話したかつたんだけどなく……

つと、その前に今日会ったことを報告しよう！ そんな事を考えてハチ君の部屋に入ってから話を切り出すことにした

「今日アメリカ支部からリサ・ヴェルデンさんって人が来たんだ」

「アメリカ支部？」

「うん」

「アメリカかあ……」

ハチ君がなんか難しそうな顔してる……

「アメリカ支部って何かあつたの？」

「特殊医療と特殊犯罪があるのはアメリカも同じなんだが……1つの組織が今勢力を拡大していつてるらしい」

「それって特犯が見つけられなかった……って事？」

「それもあるんだろうがその組織にデカイスポンサーが着いているらしいんだよな……そのスポンサーも目星は着いているんだがアジトは特定出来てない……」

……んん？ その組織、私知ってるよ？

「ひよつとして財団X？」

「やっぱ蒼も知ってたか、財団Xがスポンサーになった組織……ファウスト、だったかな？ ソイツ等がガシヤットでもガイアメモリでもない……メタルボトルつてのを使ってるらしい」

「メタルボトルは知らないけどフルボトルつて言うのは知ってるよ」

「大方ファウストの技術を流用したのかもな」

「とういかハチ君なんでそんな事知ってるの？」

「バグスター関係だと一応世界最高の医療が出来るって事で結構海外から受けに来る人もいるんだ、そういう人からな」

「あー……だからコッチ特殊犯罪よりも情報があるって事かなく……でもなんで私達特犯が知らないんだろ」

「さあな……向こうが喋ってないんだろうが……」

そう2人で色々と考えていたけど答えは出ず、諦めた私はハチ君に抱き着いてベッドに飛び込んだ

「んな!?蒼、おまつ!／＼」

「ふふーん、ハチ君こうやって抱きつかれるの大好きだって知ってるもんね〜!」

「……ワンコ」

「んなあ!?!」

今のは聞き捨てなりませんなあ!

私がワンコ!?!どこが!?!ただ衝動的に抱きつくだけだよ!?!

「へー……そんな事言うんだ、へええええ……」

「あ、あの蒼さん?」

「そんなこと言うハチ君にはお仕置でーす!」

そう言ってもっと強く抱き着く

「暫くこうやって抱き着いている刑にしよす、特犯の命令だよ……」

／＼

「……顔真つ赤だぞ／＼」

「知らない!／＼」

コイツらはイチャつく時はイチャつく 後編

湊side

「暫くこうやって抱き着いている刑にしよす、特犯の命令だよ……
／／／」

「……顔真つ赤だぞ／／／」

「知らない！／／／」

……あーあー聞こえてるぞ若い奴等

「上は上で騒々しいですねぇ」

「若いとこうやってイチャつけるのはあるんですかね」

「でしょうねえ、私も暁斗アキトさんとはこうやってお家デートしましたし」

「うちはそんなこと無かったですね、基本来也クルマに振り回されっぱなしで、やれ映画に行こうやれカフェに行こうやれゲーセン行こうって」

「愛されてますねぇ」

「ただ振り回してるだけですよ。お陰でいつも疲れていますし」

「でも好きなんでしょう？」

「じやなきや結婚なんてしてませんよ」

私が来也の事を愛しているのは事実だ、そして今までもずっと愛している。でも時々本当に自分は愛されているのか、なんて不安を感じてしまう

こんなふうを考えてしまうのは来也の愛を全て独占してしまいたいからだろうか……

「私ですね、時折暁斗さんから愛されていないんじゃないか……とか暁斗さんからの愛情を全て独占してしまいたい……って思うことがあるんです」

「はえっ!？」

「どうしたんですか？まるで考えていたことを見透かされていたかのような反応をして」

「いつ、いえーど、どうぞ続きを」

……千鶴さんは時折考えている事を当ててきて本気でエスパーなんじゃないかって考えてしまう

「でも、そういう時は自分の頬を叩いてから暁斗さんのことを信じるようにしてるんです」

「……」

「本当に大切な人から受け取っている愛を疑うなんて…本当に罪深いことだと思っけていますし、彼がそんな事しないって知ってますし」

受け取っておいて信じない、なんて失礼にも程がありますしね。それに、大切な家族の愛を奪う必要なんてないですし、私が蒼を心の底から家族として愛しているんだから」

「……そう、ですね。ありがとうございます」

「……？ いえいえ」

確かに私が信じない、なんてどうにかしてた

……久しぶりに本気の想いを伝えよう

「たでーまー」

考えていると来也が帰ってきた……よし！

「千鶴さん、料理任せました。来也、ちよつと来てくれ」

「はーい♪」

「ん？ 湊どうし……うわっ!？」

ちよつと強引だが来也を自室に引っ張る

「なになににどうしたの湊?」

「ちよつとの間、黙って話を聞いてくれないか?」

「……おう」

来也が静かになったから私は話し始める

「……大好きだから」

「……ん?」

「来也の事が、誰よりも、何よりも大好きだから。絶対に、裏切らないから」

「……」

「久しぶりに言うけど……愛してます／＼／」

来也は……ん? 顔が真っ赤だ

「……なんだよ、いきなり……／＼／たつく……」

そういうと来也は私を抱き寄せた……っ!?

「来也っ、なにしてっ！」

「湊の事、愛してるに決まってるだろ、お前より魅力的な女なんて知らないし見たことも無い。お前以外を女としてみることもなんて生涯ありえない」

「なにいつて…！」

「良いか？ 大方愛されていないんじゃないか、なんて考えたんだろ。けどな、俺はこうやって比企谷家の皆で暮らせる事が何よりも幸せなんだよ。…だから言う事を忘れて、不安にさせたんだよな…悪い」

「そんな事っ！」

「…お前の以外の女に惚れるなんてありえねえ、俺を信じろ」

「…わかった／＼／＼」

…しばらく私達は静かに抱き締め合っていた

湊 side end

千鶴 side

いつも思うが湊さんの考えている事は顔や雰囲気に出るから割とわかりやすい

だからこうやって悩んでいることをズバッと解決する事が出来る

「お邪魔します」

「暁斗さん、いらっしやい♪」

「あれ？ 来也さん達は？」

「少し御用事が♪」

「少し楽しそうな顔してるけどほんとに何があったよ」

「夫婦水入らずよ？」

「お、おう…」

全く…こういう時は鈍感なんだから

この前だって食器を買いに行った時目に映った可愛いくまさんぬいぐるみを見てたら『どうした？ 食器はここだよ』……っ！

確かに食器を買いに行ったのにぬいぐるみ見てた私が悪かったけ

どもそこは『欲しいのか?』……くらいは言って欲しいのよ!?

ホント鈍感さんなんだから……心の中で愚痴つても仕方ないけどね

「あ、そうだ」

あら?・暁斗さんったら玄関に戻って……って何かしら、その袋は

「それは?」

「ん?千鶴にあげる」

「ふーん?」

なんだろ……そう思っただけを袋を開けてみる…!?

「ツ!」

「あれ?お気に召さなかった?違った?」

「こ、これ!」

「前欲しそうに見てたくまのぬいぐるみだよ」

「き、気付いてたの!」

「気づいてないと思ったの!」

「暁斗さん鈍感さんじゃない!」

「好きな人の考えてることくらいわかるでしょうよ!」

「~!!/~/」

ホント、この人は狡いポジションに居ることに気付けないのかしら

……

こういう事されるから……鈍感さんだって言うに言えないじゃないかな
い

「(大好き……♥)」

心の中でそう呟いて、私は思いつきり暁斗さんに抱き着いた♪

暁斗さん、大好きよ♪

千鶴side end

川崎沙希は愛されている

八幡side

ゴールデンウィークが過ぎてはや2日

結局雪ノ下はバグスターウイルス撲滅課に入隊できた

元々一次試験に合格すればほぼほぼ入れるようなものだから問題は（こちらとしては大有りだが）ない

とはいえ新人研修という名の扱きにアイツが耐えきれるかは不明だがな

しかし他の奴らはチームをつくったり入ったりしていたが、雪ノ下だけチームにいない、理由は雪ノ下をチームに入れようとすると、やれ低レベルな所に居たくない、やれ自分一人でバグスターは対処できる、などと言っていた……勿論だが今の雪ノ下レベルではバグスターユニオンに勝つことすらとてもじゃないが難易度が高いだろう

1週間の新人研修を済ませないと行けないので今のところはオペは出来ないので被害者が出てくることはないだろう

それに不満を感じたのか雪ノ下は花家に喧嘩を吹っかけ、同じガシャットでの戦闘で惨敗している所をみた

遠距離特化の相手なら接近戦でなら勝てると踏んだんだろうが花家は現状最新のスターターガシャットである『BANG BANG SHOOTING』を持つてる、専用のガシャットを持つてるって事は白兵戦も同期のメンツに比べりゃ群を抜いて強い、なんで雪ノ下が勝てると思ったのかが本気で分からない

んで今は総武校で3人か4人の行動班を決めることになった、俺は彩加と彩加につられてきた下田君が来たのですぐに決まり、葉山グループも決まったようだ

そして今、職員室で平塚先生から俺と蒼個人で依頼を受け取った

内容は『川崎沙希という生徒が深夜バイト、又は援交しているかもしれないと弟の川崎大志から連絡があった、こちらで聞いても何もしてないの一点張りなので、調べてくれ』とのことだ

……ん？これ一高校生がやることじゃなくね？まあ大志とやらと

はサイズで待ち合わせをしているため放課後、蒼と共にサイズに向かう、すると青い髪の中학생と小町がこっちに向かう

「まて、なんで小町がいやがる？」

「やっぱ比企谷さんってお義兄ちゃんなんだね」

「えつと……比企谷さんと戦働さんっすか？」

「おう、てことはお前が」

「川崎大志っす！」

「とりあえず大志君？ここで騒いだら迷惑だからこっち座って？あ、小町ちゃんもこっちなね」

「は、はい！」

「はいはい！」

話を始める前に俺は小町に話を聞くことにする

「お前なんでここにいんだよ」

「同性だから？」

「理由になってない」

「あ、いえ俺が誘ったんっす、ひよつとしたら話に聞いていたお兄さんかと思つて」

「（……ひよつとしなくてもコイツ）」

「（小町ちゃんにホの字だね）」

「とりあえず大志とやら」

「頑張つてね？」

「??? は、はい」

俺は大志から話を聞き、要約して話す

「……つまり、大志の姉の川崎沙希が高2になってから朝方になって帰ってくるが増えて、不安で聞いたらあんたには関係ないって怒鳴られて、エンジェルなんたらから電話がきていよいよ不安になったから学校に相談したってわけか」

「はい」

「先に言っておくが……お前バカか？」

「え？」

「平塚先生みたいに話がわかる教師もいるが大抵は面倒事になる前に

切り捨てる奴が多い、今回のことがほかの教師に知られてみる、最悪退学処分ものだぞ」

大志の顔色が目に見えて青くなった

「ま、隠していてもいざずればalerるだろうがな、親に相談はしたか？」

「いえ、共働きの親を不安にさせたくないし……」

「まあそうだろうな、この当たりで朝方まであるエンジェルなんてらつつつたら時給のいいラダーの方だろうし原因は取り敢えずわかった。川崎沙希には俺が言っておいてやる。」

それと親は頼るものだ、それだけは忘れんなよ」

「はい……」

「飯代はこつちでは払う。追加が欲しけりやここに置いとく金で食え、余ればやる」

「やったー！お小遣いゲット！」

「当然大志にだ」

「鬼いちゃん!？」

川崎沙希の写真を貰って俺は大志の5000円程置いてから帰る

蒼は明日は無理との事なので明日は俺ともう1人か……

俺は3ヶ月ぶりに、エンジェル・ラダーに行った

俺の患者がここで待ち合わせだったから照井先輩に着いてきてもらったんだったな……今回も照井先輩に付いてきてもらっている、当然保護者枠だ

そして、少し探すと写真で見た川崎沙希を見つける

「川崎沙希か？」

「……だれ？」

「比企谷八幡だ、一応クラスメイト」

「……で？何しに来たの？」

「大志がお前が何かしているんじゃないかって心配して、学校に連絡した」

そこで川崎の顔色が変わる

「た、退学——」

「安心しろ、平塚先生しか知らない、注文だがラダーのマックスコーヒー……アレ滅茶苦茶美味い」

「……かしこまりました」

数十秒後、マックスコーヒー ラダーアレンジが来た為、飲みながら川崎にいう

「いくら学費の為とはいえ深夜バイトはやりすぎだ、大志は援交して
るんじゃないかって心配してた、お前が家族を助けるためにしていた事が家
族を不安させてどうする」

「じゃあどうすりゃいいの？私の学費を稼ぐにはバイトするしか無い
じゃん！それともなに!?!比企谷が金出してくれんの!?!」

「無理だ、だが方法ならある……レイズに入らないか？」

「は？何言ってるの？あたしなんか入れる訳ないじゃん、成績だつ
て維持出来ないし」

「体育良かったろ？体力面とか」

「まあ、そうだけど……」

「レイズの特種犯罪の方なら体力があればあとは最初の半年で戦闘技
術は叩き込まれるし、患者の命がかかっている特種医療課に比べりや
ましたよ」

「実感あるね」

「……黙っててくれよ、俺はレイズ バグスターウイルス撲滅課にい
る、その女の人は先輩で付き添いで来た」

「なるほどね……で、スカウト？」

「まあな、毎年人員不足だからかなり助かるぞ、少なくとも俺は助か
る」

「本人が言うのとより説得力があるね」

「そらそうだ……あと家族とも話し合えよ、お前のことを心配してく
れてんだから」

「わかったよ。深夜バイトはやめる、家族とも話し合う、それでいいん
でしょ？」

「OK、俺はそろそろ帰る、ほれ、チップだ」
「了解」

1週間後、川崎が俺の席に来た

「バイトはやめたよ、家族に話したら『なんで私たちに言わなかった！』て怒られたよ……そりやそうか」

川崎は1次試験合格をしたらしい

川崎が消えてから俺の方に彩加が来て心配そうに話しかけてきた
なんかあつたっけか……

「八幡、明日職場見学だよ？大丈夫？」

「……そうだよ、全然大丈夫じゃねえ」

葉山グループがレイズに職場見学するとかで皆こっちに来たんだ
よな……

どう切り抜けるか……

(予想通り) 比企谷八幡はバレてしまう

八幡 side

ども……比企谷八幡だ

ついに来ちまったよ職場見学……どうしてこうなるんだよ……

「総武高校の皆、今回司会をさせていただく風間大牙だ！よろしく！」

「「よろしくお願いします」」

「今回はレイズについて説明した後、実際に戦ってもらおう！まず、レイズにはゲーム病患者を治す【特殊医療課】すだ！これが一番過酷で最近だと一睡も出来ずに次の日にいく、なんてことをするドクターがいる！」

俺の事出すのやめてくれませんか？いやまあ自分の体のこと考える暇もないくらい忙しいからな……

「この課は試験を全てクリアしてから1週間の新人研修、その後仮想空間でバグスターユニオンを倒すことで初めてドクターのライセンスを取れる。2つめは犯罪者の確保をする【特殊犯罪専門課】だ！この課は違法で作られたガシャットやガイアメモリ等を持つ犯罪者を確保する課だ！ベテランだと武器を使わずに確保する奴もいる」

蒼だな、間違いない

蒼も「アチャー」って顔してるし

「3つ目はガシャットやガイアメモリをつくる開発課、この課があるおかげで俺達は戦える、縁の下の力持ちだな！ここまでで質問はあるか？」

「あの一」

「はい！」

「バグスターユニオンはどれくらい強いんですか？」

「そうだな……過去にチームを組んで挑んだ奴がいるが……そのチームが惨敗したって言えばわかるかな？」

「……」

「それくらいしないと命は預けられない、そういう事だ、ちなみに過去に試験を1発、しかも2人チームでクリアした奴等がいる」

「そ、それって誰ですか!？」

「ここにいるよ、八幡、彩加!カモン!!」

ちよつち風間さんなにしてくれちゃってんのおおおおお!?

「……あい」

「彼が試験を1発でクリアした人物だ!今では1日に3人もの患者を救っている!八幡一言頼む」

「えー、紹介されました比企谷八幡です。多分8割の方が嘘だと思っているでしょうが本当です、風間さんは俺の入隊試験の時の試験官だったんで聞いてみたらいいと思います」

「サンキュ、後で実演お願いしてもいい?」

「事前に言ってくださいよ……まじで夜道は背後を気をつけてくださいよ。俺とか俺とか俺とかに刺されても文句言えませんし」

「彩加と八幡で大丈夫か?」

「……俺と彩加、なんか風間さんの恨みを買うようなことしました?」

「いや、なんにも?」

「はあ……わかりました」

仮想空間に入った俺はいきなり彩加の恨めしそうな視線を受ける

「八幡……」

「巻き込んで悪い……」

「今から2人の戦闘を見てもらい、そのあとにV バーチャル バグスターウィルスと戦ってもらうぞ!この2人の戦い方を見ておいてくれ!」

「だつてさ、八幡」

「参考になるかはわからんがな」

車輪のような形状をしたバグスターユニオンを見ると俺はタドルクエストを、彩加は爆走バイクスロットに入れ、バグヴァイザーにドレミファビートを入れる

TADDLE QUEST!

BAKUSOU BIKE!

D L M F B E A T !

「展開！」

ガシヤット!

バグルアツプ……! !

ド・ド・ドレミアソラシド!

OK! D L M F B E A T !

ビートゲームの装甲を装着した俺と爆走バイクを展開した彩加

バグスターユニオンが高速で迫る中俺達は横に飛んで回避、俺は左肩のスピーカー型の装甲から音符弾をバグスターユニオンの行くであろう軌道に放つ

予想通りバグスターユニオンはその軌道通り動き全弾命中、更に彩加が俺の肩を足場に跳躍、上空からガシヤコンチェーンガン チェーンソーモードでたたつ斬る

飛沫のようにバグスターウィルスの欠片が飛び散る中、俺は宝箱を開きエナジーアイテムを入手する
マッスル化!

うっし、無難なの出てきた。欲を言えば高速化が欲しかったが贅沢は言うつもりないしな……畳み掛けるか!

コ・チーン!

氷属性モードにした俺は地面にガシヤコンソードを突き刺し辺り一体を凍結する

彩加は足元が凍結することは既に何回も俺とオペをしてるから慣れてはいるがバグスターユニオンは違う

こちらに突っ込んでくるが横に跳んだ俺を追い掛けるがツルツルに滑った地面ではまともにバランスを取れず転倒、そのまま壁に激突する

「彩加！」

「わかった！」

ガシヤット! キメワザ!

B A K U S O U C R I T I C A L F I N I S H !

彩加は氷の地面を滑るように移動し、動けないバグスターユニオン

に対して四方八方からの斬撃をする

「はっ……ふっ……てやあ！」

彩加は徐々に加速していき最後には線のようになっており、線が触れた部分から『HIT!』のエフェクトが発生しているようにも見える

最後、減速した彩加は宙を舞い……

「てやああああ!!！」

PERFECT!

トドメの斬撃によりバグスターユニオンを斬り裂く、真つ二つになったバグスターユニオンは爆散し……GAME CLEARの文字が出てきた

「……と、こんなふうに専用のガシヤットを使って倒すんだ、彼らは専用のガシヤコン持ちでこれを持ってからかなり時間が経っている、だから使い慣れているが、新人だところは行かない、それを体験してもらおう、1人ずつやってもらおうから頑張ってくれ」

あーあ、これ全員詰んだよ

そう考えていると

「比企谷君、卑怯は良くないわよ」

……面倒なのってきた

雪ノ下は惨敗する

八幡 side

よお、戦働八幡だ、今俺はすつげえムカついてる、理由は目の前の高慢女こと雪ノ下になんか訳わかんねえ事言われてるからだ

「比企谷君、卑怯は良くないわよ」

「いったい今の戦闘をみてどうしてそう思ったのか質問したい」

「現在ガシヤットを2本同じ利用は不可能なはずよ、それなのにあなたはそれをしている、どう考えても卑怯な真似でしょ?」

周りから『えー嘘だろ』とか『所詮卑怯者だー!』とか言っているがレイズのサイト見てないのか?

「レイズのサイトにもあるが技術課が作った、アーマーガシヤットだ。専用の装備に装填することで強化アーマーとして使える

現状使えるのは俺ともう1人だけだがバリエーションを増やしていく予定らしい」

「へえ……造れと脅してまで力が欲しいのね、呆れるのを乗り越して尊敬するわ」

「はあ? 何勘違いしてるか知らんが、俺はテストガシヤットや新作ガシヤットのテストが多いんだ。というかコDLMF BEATレ 自体も俺専用じゃないからな?」

「今貴方が使ってるじゃない、個人保有はどうなのよ?」

「今バグヴァイザーを持つてるのが俺だけだから結果的に俺が持つてるだけだ。そもそも俺は弟子用のガシヤットを優先して造れって言ってるしな」

苛立ちながら俺は言う、なんでこんなに突っかかってくんだよ……

「どうせ、それも嘘でしょう? もし事実だとしてもあなたの弟子も屑でしょうね」

「は……?」

やべえ……限界だわ

「おい雪ノ下……俺の弟子にはなお前に完封勝利した花家も居るんだぞ」

「なっ…!?!」

「お前に勝った花家もクズだと…へええ？」

お前のみみっちいプライドで喧嘩を吹っかけられた花家が可哀想で仕方ねえよ」

「ッ……………」

やべえ、凄い眼差しで睨み付けられてる……全然怖くないけどな

「別に俺を馬鹿にしようが勝手だがな、俺の弟子を馬鹿にするのは許せねえなあ……………」

久しぶりに頭に来たのであろう、そろそろ手を挙げちまいそうだ…

「八幡、落ち着いて」

それを察したのか彩加が背中をポンポンと叩く

……………すうう……………はあああ……………

「そうだな、悪い」

「ううん、手を挙げたら八幡が悪者になっちゃうし」

だな…あつぶね

「……………」

雪ノ下が小さく何かを言っている、なんだ？

「あ?」

「決闘よ!!」

「……………は?」

「……………え?」

「私が勝ったら土下座して今後私の命令に逆らわないと言いなさい!」

「はああああ……………いいぜ、俺が勝ったら2度と俺にいちやもんつけんなよ」

「上等よ!」

「すみません風間先輩、フィールド展開してください」

「OK、さすがに俺もイラツと来たからな。徹底的に潰せ。どちらにせよレイズ内での演習扱いだ」

「で、雪ノ下ハンデどうする?」

「?……………ああ、私がハンデを付けるのねどれくら「いや俺の」結構よ!」

「今回は同じガシヤットだけど経験値が違い過ぎるぞ？そもそも訓練生相手だし」

「その程度の壁、私が越えられない訳無いわ！早くしなさい！」

「へいへい……」

俺と雪ノ下は風間さんに量産型ガシヤットである【MIGHTY ACTION】を貰い、フィールド内に入った

よし、行くか……

MIGHTY ACTION！

ガシヤット！

アーマーを装着しガシヤコンブレイカー ブレードモードに固定されたガシヤコンウエポンを握る

訓練生だった頃はお世話になったし今も時折使う事もある

クセの強いものもある量産型ガシヤットの中では安定して強いガシヤットとも言える

この武器はガシヤコンソードの次に手に馴染む、使い勝手が良いしな

「……よしー」

「惨敗する準備は出来たかしら比企谷君」

「さあね、どんな戦い方をするか知らんし興味も無い」

俺を含めた新人特有の単純な攻撃をしてくるのかフェイント等を含めた感じなのか……

【BATTLE START】

「ハアッ！」

「そうかよー」

第一撃目は単純な横振りの攻撃、雪ノ下ガシヤットブレイカーの刀身を蹴り上げ回避し剥き出しの腹に蹴りをぶち込む

「ぐふう!？」

吹っ飛び横転してしまうが即座に立ち上がり袈裟斬りを決めよう

とする

「よつと」

2本の指で受け止めガシャコンブレイカーで斜め上に切り上げる、雪ノ下はクルクルと宙を舞い更に跳躍してから踵落としをぶち込む

「がひゅ!?!」

「よつと……流石マイティーアクション、アクションゲームモチーフなだけあるな、身体が軽い」

冷静に状況分析をしていると立ち上がった雪ノ下から怒りの声が発される

「なんなのよ、ソレ……卑怯じゃない!」

「経験値の違いだ。だからハンデはいるか? って聞いたんだよ……1回くたばって自分を省みろ!」

ガシャット! キメワザ!

MIGHTY CRITICAL FINISH!

俺は雪ノ下に急速接近をし袈裟斬り、更に後ろに回ってから斬りあげる事でX字に斬り、装甲が解除された

「な……ぐつ……」

気絶してしまった雪ノ下を抱えてフィールドから出た

ふいふい……疲れた……ってなんだ? スクールカーズTOPの葉山がこつちに来るじゃねえか

つか胸倉掴んでくるしさあ……なんなのお前ら?

「比企谷、何でこんなな過剰な攻撃をした!」

「か、過剰?」

普通にあれくらいするだろ

訓練生だろうと訓練生同士でこうやって戦うもんだろ?

「あれの何処が過剰なんだよ、普通に戦っただけじゃねえか」

「だからってあそこまで痛めつけて……人がやることじゃないだろ!」

「あんなの普通の演習じゃねえか」

「こう言っても【葉山の言葉】という所が大きいのか周りから『そーだそーだ!』だの『お前なんてやめちまえ!』とか聞こえるが…」

「……あのさ、俺の事で文句を言われるなら無視して終わりだったんだよ。そこで弟子を侮辱したからこんな結果になったんだよ、お前だってグループを侮辱されたらキレるだろ?それと同じだ」

それ以前に一応見学させて貰ってるって立ち位置なのに卑怯者呼ばわりとか、さ……普通有り得ないだろ

「こんななら態々俺と彩加でやるべきじゃなかったよ」

「うん……流石に葉山君も、皆も、有り得ないよ……」

「……」

彩加が俺が言ってる事に賛同するような事を言うと葉山は強く睨みつけてくる

「それと、今後総武校がウチに職場見学なんてありえないと思つとけとよ、総武に抗議するつもりだ」

「な!?!ふざけるな!」

葉山は激昂し殴り掛かるが素手で抑える

「ほらさ……こういう所だよ」

見学させて頂いてる立場のお前らが職員に手を出すなんて言語道断!……葉山も、葉山に同調するような奴らも……いい加減にしろよ!」

「っ!!」

俺は矛先を監督教師に向ける

「先生……あなた引率と監督なんですよね、では何故雪ノ下がいちやもんを付けた段階で止めなかつたんですか?」

「そ、それは……」

「あ、言い訳なんて聞きたくないんで、どうせ俺みたいな奴がレイズに入れるわけがない!雪ノ下が勝って俺が不正に入隊した!とかなんやら言うつもりだったんでしょ!」

だがそれをするって事はレイズの評価を落とすことに繋がるし現状唯一バグスターウイルスを対処出来る組織なんだ

崩壊したらとんでもない事になるんだからそんなことする訳ない

だように……何でそんなこともわかんねえんだ？

「……」

「ハア……沈黙は肯定を受け止められますよ、まあいいです、こちらも抗議させてもらいますんで」

こうして職場体験は解散になった

ああクソ、気分悪い……

1時間足らずで職場体験終了とか前代未聞だろコレ

俺は予想以上に有り余った時間をレイズの自室で蒼と共にだらける事にした

「蒼く癒しをくれ……」

「はいはい……しかしまあ、雪ノ下さんも何を考えていることやら、ハチ君の話を聞かなかったのかな？」

「じゃなきやあんな事言わねえだろうよ……ああ気分悪い……」

あの後すぐに総武に抗議をしだ結果新聞にもあの件が載ることとなった

そして1週間の間にあの監督先生は解雇、校長曰く『監督も務められないような人を置いておきたくありません』とのことだ

平塚先生からは土下座され掛けた……させなかつただけだな

流星にほぼほぼ無関係な平塚先生が土下座するのは意味がわからないからな

雪ノ下は本来ならレイズから訓練生として2年過ごす事になり、本来ならここまでやらかしたのだから総武からは退学だったはずだが……雪ノ下の本家からの圧力で、総武からは停学3週間になった。……ここまでやらかして新聞にも載つたのによくそこまでの権限があるもんだ。逆に感心する

葉山は停学1ヶ月のみである

今回最大の被害者は総武校だろう

総武の職場見学にレイズを含まないことも約束され、今年の2学年のレイズへの入隊は全拒否されたからだ

雪ノ下は『クールビューティー』から『レイズ入隊拒否をつくった原因』にグレイドダウンし、元々の評価が悪かったレイズでも更に地にのめり込む程評価が悪くなってしまった

2章

XXXは生きたいと願う

三人称 s i d e

「ハッ…ハッ…」

1人の少女が森の中を走っている

背中に槍を持ち、身体中あちこちが傷だらけ、靴を履いてない為足の皮は剥がれ血が流れ、肩からも出血しておりあちこちの傷口から絶えずタラタラと血が流れている

その20数メートル程背後にはこの世の生命体とは呼べないであろうダークグリーンの異形が少女を追尾している

金属質で戦闘機のような見た目からは人工的に作られた機械生命体、という風にも見える

その異形は腕の形を変化させ、機関砲の様なものにする

「くっ……い」

彼女は異形が銃撃するであろうことを悟り青端子の黒いガイアメモリを起動、槍に着いていた4つのスロットのうちの一つにメモリを装填する

J O K E R ! M A X I M U M D R I V E !

そうすると2本のメモリが現れ、スロットに入る

C Y C L O N E ! M A X I M U M D R I V E !

L U N A ! M A X I M U M D R I V E !

そうして槍を振るうと小さな竜巻が発生し、幻影が発生し異形を攪乱する

その隙に森を抜け、廃工場の様な建物の中に入る

「はぁ……はぁ…」

荒い呼吸を整え、ふらふらとまた歩き始める

外の竜巻は消え異形がコチラに来るのも時間の問題だろう

もう走る程の体力も残ってない、廃工場から出て歩くが坂で足を滑らせゴロゴロと転がる

「っ……うっ……」

立ち上がろうとするが全身の傷が動きを阻む

風が肌を撫でる度に激痛が走り、限界を超えた身体は立ち上がるこ
とさえ困難にさせる

這いつくばりながら動き、森を抜けようとするが……それよりも先
に異形に見つかってしまふ

『――』

不快な機械音が流れ、異形の頭部が少女側を向く

「くっ……」

這いつくばり逃げるもあっさりと捕まり、首根っこを掴まれ持ち上
げられる

「カヒュッ……」

呼吸が出来なくなり、視界が狭まる。周りから暗くなり、意識が飛
びそうになる

「(もう、だめ……)」

全てを諦め、死を覚悟した

TRIGGER! MAXIMUM DRIVE!

BAKUSOU CRITICAL FINISH!

しかし、神はまだ彼女を見放してはなかった、蒼い光弾が異形に命
中し、遅れて黄色の丸鋸上のエネルギーが異形を斬り裂く

異形が吹っ飛んだ事で放られた少女は地面に叩きつけられ、必死に
呼吸をし、酸素を身体の中に流し込む

「ちよ、大丈夫……っ!? 彩加君!」

「う、うわあっ!? 道具あるからここでどうにかするからあの怪人おね
がい!」

「わかった!」

少女に駆け寄る2人の人間、蒼と彩加である

彩加が少女を抱え森を抜け、治療道具で止血をする

「大丈夫!？」

「……」

安心からか、気絶してしまった少女の脈と息があるのを確認した彩加は手当をし、レイズ車に寝かせた

一方の蒼は、トリガーマグナムで異形に攻撃しつつ接近し、胸部に掌底を打ち込む

『』

「長丁場になるとダメなやつだね……」

少し仰け反るだけで直ぐに迫る異形に対し、このまま戦っても無駄だと理解した蒼はトリガーマグナムにライトニングメモリを装填する

LIGHTNING! MAXIMUM DRIVE!

何十発ものエネルギー弾を撒き、それらがランダムに異形を攻撃する、最後に一際大きなエネルギー弾が異形を貫き動けなくなる

そこに跳躍した蒼の後ろ回し蹴りが命中、異形は爆散した

「……ん？」

蒼は残っているのが機械の残骸のような物のみであり、人型の兵器か何かかと思ってしまうも、そんな事は無いと頭から振り払い、彩加達の元へと向かった

男は全てを知っている——少女は生きている事を実感する

三人称 side

何処かの遊園地のような場所、その見た目にはそぐわない巨大な建物が中央でひとつ顕在し、その中では細目の白衣を着た男が慌てた様子でキーボードを叩く

「なっ……何故だ！何故！ファントムクラッシュヤーが負けた！ライダーウエポンになど負けるはずのない！何故、何故エエエ!!」

狂ったように叫ぶその男に対し、その建物へと侵入した顔が隠せるほどの黒いフード付きコートの男が言う

「ファントムクラッシュヤーのプロトタイプかつ、複数の機能をオミットしたからだろ。リベルの追尾の為のファントムクラッシュヤーならそれで十分……ってなア？」

「うるせえっ！財団に雇われたゴミの分際でエツ!!」

煽る様に言う男に白衣の男は近くにあったものを投げつけるが男がは片手で受け止める

「しかしまあ、^{イレギュラー}異物のせいで始末し損ねあつてのはあるかもなあ

……代金上乗せで、俺がりベルを始末してやるよ」

「何イ？」

「そうだなアア……前報酬で、ガイアメモリを2本よこせ、無論完成品だぞ」

「チィ……」

白衣の男は黒コートの男を始末するべきか迷うが、ガイアメモリを2本寄こし例外作にして逃亡者を始末出来るのならば安いだろうと、適当なメモリを投げ渡す

「ンじゃ、殺りますかア」

フードの下で男は歪な笑みを浮かべ、アメリカから来たかいがあったかと思ひ、行動に移した

レイズの病室で少女は寝かされていた

彩加は少女が起きるのを待っていると、少女の肩の傷から見つかった装置と、ガイアメモリを調べていた材木座が来た

「あ、材木座君」

「とりあえず結果だけ言ってもいいか？」

「うん」

「肩の装置は爆弾だった。直ぐに解除と分解をしたからもう問題ない」

「ば、爆弾!？」

「彼女が肩に突き刺した際に一旦機能が停止していたが、彼女の様子からするにメモリの実験動物のような扱いだっただった可能性が高い」

「そんな……!？」

少女に爆弾を仕込み実験動物にしたであろう団体もしくは組織に對する怒りで爪が食い込むほど拳を握める

「到底許せない話だ……!？」

「うん……! 特犯の人達に言わないと……!？」

「その前に、彼女の持っていたメモリについても言っていないか？」

「あ……うん」

「彼女の持っていたメモリは既存のメモリとは大幅に異なる。彼女が所属させられていた組織の創った物で間違いないだろう」

「やっぱり……」

「JOKER：切り札の記憶を所持しているらしい。能力は、不明だがな」

「切り札の、記憶……」

所持していたガイアメモリの能力は不明ではあるが、メモリのベースとなる記憶はわかり、そこから能力を推測する事が出来る……そう彩加が考えていた時、少女が目を覚ます

「ん……う……」

「あ、起きた!？」

少女は虚ろな、疲れきったような目で周囲を見渡す、白い天井や格子のない窓、綺麗に掃除された部屋や暖かい布団、少女が囚われていた場所では到底有り得ないモノである

助かったのだろうか、そう考え、視線を移動させると、彩加達の方へと止まる

「ッ……！」

ここに来て敵か？そう思い警戒するが、彩加は穏やかな笑みを浮かべる

「おはよう、身体は大丈夫？」

「え……あ、うん」

「ご飯持ってきたよ、食べて欲しいな？」

「……」

前の場所では考えられない心配をするような言葉、更に食事まで用意されている。食事に関しては毒が入っているのではと思い警戒する少女だが、それを察した彩加が全ての料理を一口ずつ食べる。

飲み物に関しては流石に口につけるわけには行かないので、自販機で買ってきたものを渡す。

毒が入っていないことを理解した少女は食事を口にする

「ッ……！」

今まで食べたどの食事よりも美味しく、気付けば涙を流しガツガツと食べていく少女

「美味しかった？」

「うん……！」

少女は警戒を解き、涙を腕で拭う

「えっと……名前を教えてもらっても、いい？」

「リベル……個体識別番号は2009」

「個体識別番号？」

「……私、人造人間、っていうらしいの」

「ッ!？」

少女……リベルは自らのことを人造人間と言った、つまりリベルはその組織に造られた存在である

そしてリベルはガイアメモリを貰い性能実験時に『最初に手にした武器を最適の形に変化させる』というイレギュラーな能力を発現し、その結果実験として10年以上もの間戦わされたこと、そして終了^{処刑}される^刑ことが決定された際に脱走したことを明かした

「そんな……酷い……」

彩加はそんなリベルの事を痛ましく思い、思わず抱きしめていた「ッ!？」

「大丈夫、もう大丈夫、守るから……!」

リベルはその温もりから、泣きそうになる……しかし、その時、サイレンが鳴り響く

彩加がリベルから離れ、話を聞こうとした時に蒼が来た

「侵入者が来た! 彩加君はこの子とかを頼むよ!」

「う、うん!」

そしてリベルにも部屋にいるように告げ蒼はリサと合流し、正面玄関からやって来たという侵入者を迎撃しようとする

蒼達が正面玄関に来ると、侵入者である黒コートの男が警備員を全員叩きのめし終えた所らしく、蒼を見るなりやつと来たか、とでも言うが如く地面に倒れていた警備員を蹴り飛ばす

「この警備員は軟弱だなア、俺一人に負けるなんてさア」

「お前……!」

「おいおい、初対面のやつに対してお前はねエだろお前は、俺はクロだよ」

「クロ……?」

「ッ!？」

クロという名を聞いた時、蒼は首を傾げ、リサは顔色を悪くした

「おおつとおお?そこに居るのはア……リサちゃんじゃねーか!」

「ッ!？」

「態々アメリカから俺を追ってここ^{日本}まで来てくれるとは、嬉しいねエ。親の仇だからかア?」

「え?」

親の仇?クロの口から出てきたその言葉に蒼は更に首を傾げてしま

う

同時にリサからは殺意に近い怒気を纏われ、眩いた

「やっぱり、お前ガ……!」

「そうだとも、お前の両親は俺が殺したんだよオオ! ヒヤヒハハ!!」

「……殺す!」

狂ったように叫ぶクロに堪忍袋の緒が切れたりリサはビルドドライバーを装着、フルボトルを装着しラビットタンクになる

RABBIT TANK!

そのままドリルクラッシャーを構え一気に跳躍し距離を詰める

「ほう?」

クロは後ろに跳び、攻撃を回避するとビルドドライバーとロストボトル……そしてハザードトリガーを取り出す

そしてハザードトリガーを起動しビルドドライバーに差し込み

HAZARD ON!

「なっ……!?!」

蒼は勿論の事、リサでさえも驚愕してしまう

「ビルドドライバーは元々ファウストの技術だ。レイズがそれを模倣しただけでな……んじゃ、ゲーム……スタアト」

素晴らしい、ロストボトルをビルドドライバーに装填し、レバーを回転させる

COBRA! SPANNER!

ドンテンカーン! ドンテンカン!

ガタガタゴットンズツタンズタン! ガタガタゴットンズツタンズタン!

Are you ready?

「変身」

変身、この世界では展開として表されるフレーズのハズのそれが、変身という言葉で出された

すると鋳型のようなフレームのハザードライドビルダーが形成され、クロはそれに挟まれる

UN CONTROL SWITCH!

BLACK HAZARD!

ヤベーイ!

変身後のクロの姿は、「クロ」という名前に相応しく、全身刺々しく真つ黒であり、唯一色の着いているところは複眼の部分の左のコブラと右のスパナ部分のみである

「……名前は仮面ライダー……ブラッドビルド……よろしくウ！」

そう名乗ると、クロはりサへと攻撃を開始した

クロは大暴れをする

三人称side

「ヒヤハアアア!!」

「きやあああつ?!」

クロが一方足を踏み入れると同時にリサの視界いっぱいにはクロの膝が映り、その直後には膝蹴りが炸裂しリサは後ろへと大きく吹っ飛ばされ、更に背後から裏拳で背中を殴りつける顔面から吹っ飛んだところに背中からの打撃で逆くの字に吹っ飛んでしまう

「リサさんっ!」

TRIGGER!

蒼はトリガーメモリを起動しトリガーマグナム召喚してクロの方へと飛ぶ

「ぐおっ!」

後頭部にクリーンヒットしたクロは返ってきたトリガーマグナムをとった蒼の方へと視線を向ける

「2対1かア……」

「何か問題でも?」

「別にいいぜ?どうせお前らは勝てねエしな」

「は?」

「ほらよっ!」

「くっ……!」

標的を蒼に変えたクロはドリルクラッシュャーを呼び出し銃モードで蒼を狙い撃つ、蒼はトリガーマグナムで撃ち落としながら距離をとる

「飛び道具特化のフォームか……ならなア!」

クロが開いた手を蒼へと向ける

その直後、クロの背後から大蛇型のエネルギーが現れ、蒼に食らいつこうと迫る

「ッ!」

驚愕した蒼は壁へと走り、壁を蹴りクロへと急接近する

大蛇は壁を蹴り回避した蒼を追う事が出来ず壁に衝突し壁に大穴を開ける

「あつぶな……」

開けられた大穴に呆然としてしまうが、クロの拳が目前に迫る為右腕でガードし衝撃を消すために後ろに跳び着地した時、腹部に違和感を覚え下を向くと瞬間移動したクロが拳を添えていた

「なにを——」

「ヒヤハアア！」

「ガッ!？」

クロのワンインチパンチにより壁に叩きつけられ、その衝撃に視界がチカチカする

「……」

「まだトんでねえな……ま、当分は動けねえしリサちゃんを叩きのめすには充分かあ……」

「っ……い！」

あの蒼を秒殺したクロに対し、必然的に恐怖を抱くが引く訳にはいかない

リベルや他の患者を守る為に震える腕を抑え付け、ドリルクラッシュャーを向ける

「へえ……勝てないとわかってても頑張るなア」

「今、引く訳には……い！」

「へえ……」

瞬間、リサのホップスプリンガーに跳躍とクロの強化剤を含んだドス黒い脚部による跳躍により先程まで彼等が居た場所の地面が割れ、ドリルクラッシュャー同士の衝突が起こる

「くっ……」

「ヒヤハアッ！」

両者着地をし、リサはドリルクラッシュャーにハリネズミボトルを入れ、クロはバッドドロストボトルを入れる

Ready Go!

リサのドリルクラッシュャーからは白い無数の針型のエネルギーが、

クロのドリルクラッシャーからは紫の蝙蝠の羽型のエネルギーが現れる

ボルテックブレイク!

ボルテックブレイクを発動し急加速した2人が同時に衝突した

エネルギー同士の衝突により大爆発が起き、周囲に衝撃波が発生、辺りのモノを吹っ飛ばし、壁に激突させる

技の発動前とは逆の位置に2人が立っている。そして――

「あ……………」

リサの左肩から右腰に掛けて、装甲を破壊されたうえ切り裂かれ、倒れ気絶してしまった

「短期決戦で行きたかったらしいが……………残念だったな?」

倒れているリサや動けない蒼を無視し、クロは歩を進めていく

戸塚彩加は狂犬と化す

三人称side

「ふんっ！」

「ギャアアアアアアッ!?!」

警報が鳴り、警備員の悲鳴が廊下に響く

クロは廊下をスキップするように移動し、上階へと向かう

真つ黒の仮面ライダーがスキップするという本来の仮面ライダービルド ハザードフォームのOVER FLOWとも、ファントムビルドとも違う不気味さがあり、自分の目的の為に加減をせずに生身の人間を攻撃する様は狂気を感じさせる

「さて……どーん！」

リベルの部屋を見つけたクロは扉を蹴破りドリルクラッシュャーの先端をリベルが居るであろうベッドに向ける

「さて、リベルちゃんはこのベッドに居るんだろうなあ……」

「ハアッ！」

「ぐっ……!?!」

ベッドを捲るとそこには彩加がおり蹴りを顔面にくらい仰け反る

「おー……やるねえ、君。戸塚彩加、だっけ?」

「なんで知ってるの?」

「予備知識は必須だろ?」

そう言うところクロは2つのロストボトルを取り出し、装填する

KUWAGATA!CASTLE!

Are you ready?

UN CONTROL SWITCH!

BLACK HAZARD!

ヤベー!

するとクロの複眼がコブラからクワガタに、スパナーから城型のものへと変化する

「さて、リベルの嬢ちゃんを出してもらおうか」

「………どいと思っ?」

「さあね…テメエから聞き出してやるよ!」

ドリルクラツシャーを振りかぶるクロ、咄嗟に回避しギリギリチャンバラガシャツトを取り出す

「お?やるか?」

「……うん、殺らせて貰うよ」

「……?」

GIRIGIRI CHANBARA!

「ッ……!」

「……ん?どうした?気絶か?」

ガシャツトを起動すると俯き、ピタリと動かなくなった彩加にクロが煽るように言うが顔を上げた彩加を見て、驚き、焦るように言う

「な、嘘だろ!?赤と金の眼!?おま——」

「展開……」

ガシャツト!

赤と金の眼と犬歯が生え、髪型も変化した彩加がギリギリチャンバラを挿入、装甲が装着されたが色が逆転しており、白と銀、首周りにのみ金色の装飾が施されており、見たものの印象がガラリと変わる

武器もガシャコンスパローから2本の赤と金の鎌のような形状のガシャコンウエポン——ガシャコンサイザーへとなる

「ちつ……とんでもねえ爆弾仕込みやがって!」

余裕が完全に消えたクロが右腕を掲げると城壁の様なエネルギーが構築され、そこから大砲が現れるとビームが放たれる

一つ一つは小さくとも、複数のビームが装甲を貫き急所に命中する

……筈だった

「ハアアツ……!」

「な、どこに……ぐあああつ!」

クロの視界から彩加が消え——それと同時に背中から複数の斬撃による激痛が走る

よろけつつも後ろを向けば彩加がガシャコンサイザーで自分のことを傷付けていた

即座に振り向きビームを放つ、今度は腕に命中し、血が流れるがそ

んなことお構い無しに超高速で接近し蹴りからの斬撃を叩き込む

自分の体すら関心を持たず、相手を叩き潰す様は獣にすら見える

「素敵なパーティの時間だ……死ぬまで付き合ってもらうよ!」

「ハッ……狂人が!いや、獣だからなあ……狂犬か!」

「そんなこと……死ぬほどどうでもいい!」

彩加らしからぬセリフと共にまたもクロの視界から消えると斬撃、拳、蹴り、掌底……ありとあらゆる近接攻撃を瞬間的に喰らい、彩加の装甲よりも数段はグレードの高い装甲が、ひしゃげ、罅が入り、潰れる

「がふっ……!クソ!」

一方的にズタズタになぶられるような気分になったクロは反撃の為、強化剤を使用することにした

MAX HAZARD ON!

ガタガタゴットンズツタンズタン!ガタガタゴットンズツタンズタン!

Ready Go!

「潰れる、狂犬ツ!」

OVER FLOW!

ヤベー!

ビルドドライバーに装填されているハザードトリガーのボタンを押し回転させる

すると黒いモヤの様なもの——ハザードトリガーに搭載された強化剤がクロの周囲に纏われ、暴走状態であるOVER FLOWになる

しかしクロは暴走せず、構えを取る

「壊れやがれ!」

明確な悪意と共に放たれたその拳は、彩加に掴まれる

「なっ……ぐはあっ!」

「……その程度?温いよ」

掴んだ状態で腕をひねり顔面に拳を叩きつける

数歩後退した時、トドメを刺すべくガシヤコンサイザーにガシヤツ

トを挿入する

ガシヤット！キメワザ！

「な、まず——」

「消えろッ!!」

GIRL GIRL CRITICAL DEAD FINISH!

彩加がガシヤコンサイザーを投擲すると生き物のようにガシヤコンサイザーが自由自在に軌道を変え、クロを切り付けていく、そしてガシヤコンサイザーがクロの胸部に突き刺さると何かに縛られたかのように身体の自由が効かなくなる

「ハアアアッ!」

そこに彩加がライダーキックを叩き込むとガシヤコンサイザーが装甲を貫きクロの肉体にまで入り込む

「グアアアアアアアアアアアッ!」

勢いよく後ろに吹っ飛んだクロは吹っ飛んでいく中ガシヤコンサイザーを抜く、すると血が溢れ出し、地面に叩きつけられると変身が解除される

「ぐ、お……!この、狂犬ッ!覚えていろ、この借りは何時か返すッ!」

クロが地面になにかを叩きつけると煙が発生し、視界が晴れた頃にはクロは消えていた

「……」

彩加もガシヤットを抜き取り、展開を解除する

「ッ……」

彩加がこの状態……狂犬モードに陥ることはそれなりにあるが、その条件は八幡か蒼がない状態で展開することだった。

今回もまた暴走し、危うく殺しかけてしまった自分に恐怖を抱き、無茶な戦い方に意識がぼやけ、倒れかけるがなんとか踏みとどまり別室にいるリベルに声を掛けるべく歩き出した

リベルは救世主に出会う

三人称 side

「くそ……！」

彩加に敗退したクロは彩加から逃げる様に病院から去る

「クソボケめ……あんな爆弾を一キャラ風情に仕込みやがって……！」

彩加を爆弾と言い、財団Xの研究者Aの依頼を達成出来なかった事にも苛立ちを隠さない

「まあいい……あのクソアマをぶち殺すまでの期間が伸びただけだ……！」

妖しい笑みを浮かべ、クロは財団Xの研究者から貰ったガイアメモリを取り出す

「しかし幸運だなあ……こんなイイモノが俺の手元に来るなんて……！」

ガイアメモリの絵柄は1本は道路のようなもので描かれた【R】のメモリ、武器で描かれた【A】のメモリだった

93

「……」

重傷を負い、別室に移されたりベルは彩加の帰りを待っていた

しかし聞こえるのは警備員の悲鳴と戦闘音のみ、心配になり彩加の元に行く為にベッドを出ようと試みる

「う……」

1番大きな怪我である肩の傷を筆頭に体の各部から悲鳴が上がり、すぐに倒れてしまう

「い、たい……」

しかし痛みを堪え、ベッドから転げ落ち這いずる様に病室を出るリベルを待っていたのは部屋の前にいた雪ノ下雪乃だった

「だ、れ……？」

「名前を聞きたいなら自分から名乗るのが先じゃないの?」

「リベル……」

重傷を負っているリベルを部屋に戻すことも無く見下しみくだそうそう言い放つ雪乃

「そう……私は雪ノ下雪乃よ。アナタ、何者なの?」

「え……う?」

「惚けなくていいわよ。アナタがただの患者じゃないのなんて知っているから」

「どういう、こと?」

「……じゃあ教えてあげるわよ、人造人間さん?」

「ツ!」

自分の口から語らないリベルに対して苛立ちを覚えたのか何処から知ったのか冷たく人造人間である事を言い当てる雪乃

リベルが驚き、同時に彼女の眼差しに怯えたような表情を見せる

「……あなた、自分が何してるのかわかっているの?アナタが存在していたせいでレイズの方々が大きな損害を被っているのよ?」

「あ、う……」

「何か言ったらどうなの?」

「ごめ……なさつ……」

「……」

ゴミを見るような目で見てくる雪乃にリベルはただただ怯えて謝ってしまう

「……いい加減にしなさい——」

「……ねえ、何してるの?」

雪乃が罵倒の追撃を遮るように透き通った綺麗な声が廊下に響く

「……あ」

雪乃が振り向くと、壁に背中を預けた状態で脂汗を拭っている彩加が居た

狂犬モード時に蓄積されたダメージと狂犬モード自体の反動により途中からまともに歩くこともままならなくなり、壁伝いにリベルの元へと向かっているとリベルを罵倒している雪乃を見かけ、声をかけ

ただ

「……もう一度聞くよ、何してたの？」

「……この人造人間に文句を言っただけよ、生まれただけで迷惑をかけてる、とね」

「……は？」

その滅茶苦茶過ぎる暴論に彩加の表情が消え、次いで怒りの表情を見せた

「それは、違う！」

「何が違うと言うの？」

「彼女は生まれた環境が違えば幸せになれたかもしれないんだ！」

「人造人間として生まれてる時点でモルモット確定じゃない」

「違う！この子はただ自分を生み出した存在に利用され、壊されて言っただけ被害者なんだ！幸せになる権利を持っている一人の女の子なんだよ！」

「さい、か……？」

「この子は幸せになるべきだった、この子を生み出した親組織がそれを奪って、迫害して、壊していった！彼女を責めるのは筋違いにも程があるってなんでわからないの!?!この子は……リベルは何一つ悪くないんだよ!!」

「あ……」

絶望していたリベルの頬を涙が伝う

モルモットとして利用され、廃棄されまいと逃げれば機械兵に襲われ、今は存在さえ否定されていた

そんなどん底にいる自分に手を差し伸べてくれている彩加はリベルにとって、間違いなく救世主だった

「そんなもの、彼女が生み出した問題とは——」

「いい加減にしてくれないかしら？雪ノ下さん」

「なっ——」

別の場所から声が聞こえ、彩加がその方向をむくと気絶していた蒼が居た

「アナタ、ここで何をしているの？」

「あなたには関係な——」

「アナタが避難をせずにここに居ることが問題なのよ……!」

ここまでの異常事態、関係者や患者達に避難指示が出たのにも関わらず避難せずここでリベルを罵倒していた雪乃に問題があるのだ

「……あなた、本当に何がしたいの？職業体験では偏見で行動して在学校に迷惑をかけてる、同期や先輩を引つ掻き回して、被害者に対しての暴言を吐く……懲罰行為をいくつ重ねれば気が済むわけ!」

「それはアナタ達が——」

「もういいよ……黙って」

「ガッ!」

蒼は最早呆る気すら起きず、手刀で気絶させる

雪乃には厳罰が下ることだろう

「……リベルちゃん、大丈夫?」

「は、はい……」

「それじゃあ僕が運ぶね、蒼ちゃんは……」

「雪ノ下さんを運ぶよ。厳罰確定だねえ……」

米俵持ちをした蒼が雪乃を運ぶのを見送ると、彩加も辛そうな表情をしながらもリベルをお姫様抱っこする

「え、あ、え!?!/!/」

「どうしたの?」

「大丈夫!?!/!/」

「大丈夫大丈夫♪」

脂汗の量が増えており、どう見ても大丈夫じゃないが彩加がお姫様抱っこをした為かりベルはすぐに大人しくなり、頬を染めて避難場所まで運ばれた

雪乃の罰は2ヶ月のレイズ内清掃活動、2ヶ月の訓練禁止、レイズ内での監視となった

三人称 side end

由比ヶ浜結衣は比企谷八幡と友になる

八幡 side

ああクソ。風邪引いちまった

どうも風邪引いてる比企谷八幡だ

レイズの激務が祟っただのもあるだろうし若干昼夜逆転気味なのも良くなかった

健康管理がダメだったな……!

そんな風に考えていると義母さんが俺を呼んでくる

「ハチ、友達よ」

「友達?」

「ええ、女の子の可愛い友達。今更部屋に行くって」

……誰だ?川崎辺りか?等と考えて居るとピンク色の髪の毛のポインな女子が部屋に来る

「……由比ヶ浜?」

そう、由比ヶ浜だ

持っている袋には冷えピタやらスポーツドリンクやらがあり、それを俺に渡してきた

「あ、ヒツキー……えっと、久しぶり」

「ゴールデンウィーク中は部活無かったし会えなかったからな。久しぶりだ、どうした?」

「あ、えっと……同じ同好会の部員だしお見舞いに来たの!」

「まじか」

え?まじで?生まれてこの方蒼と彩加(あと材木座)以外の奴から見舞いに来てもらったことないんだが……

「ヒツキーってあまり風邪をひかないイメージあったんだけどなあ……ナントカは風邪をひかないとか言うし」

『バカは風邪ひかない』だな。バカは風邪をひいても自覚しないから……みたいな意味合いだが……おい由比ヶ浜?」

「え!?!そういう意味だったの!?!」

「……お前仮にも高校生だぞ!?!」

え、コイツ大丈夫か!?

バリバリのJKだぞコイツ!

「え、お前ホント大丈夫か?」

「失礼な!」

「いや失礼なじやねえよ。お前成績どうなのよ」

「……え、えつと……下から数えた方がはやい、かな」

「……オイオイオイ」

ダメじゃねえか

本人曰く『1年は辛うじて進級出来た』らしいが……

「あのなあ……お前これ以上単位落とせねえだろ」

「あう……」

「……蒼と俺の予定が空いた時なら勉強教えてやるよ」

「え、いいの!?!」

「問題ねえよ。お前特に大きな問題行動起こしてないし」

雪ノ下のやらかしてる事がデカすぎるから印象薄すぎたが悪いヤ

ツじや無いんだな。由比ヶ浜は

「あ……ヒツキー、聞きたいことがあるんだけど、いい?」

「おう」

「ヒツキーとせんちゃんって付き合ってるの?」

「んん!?!どうしてそう思うんだ!?!」

「あーいや……距離感とか、他の人とは少し違うな……って」

うくむ……。言いくるめ、出来そうにないな

変なところで鋭そうだし

「まあ……一応結婚を前提に、な」

「……やっぱり、そうなんだ」

「おう」

由比ヶ浜の表情が沈んでるな

どうすればいいか……

「ねえヒツキー!」

「うわ大声いきなり出すなよ!で、なんだ?」

「今から私達って友達になれる?」

「と、友達?」

いきなりどうしたんだよ由比ヶ浜

「えっと、同じ同好会の部員だし、部員全員と友達になりたいな…つて」

「なるほどね。つて事は蒼も?」

「勿論!」

「んじゃあ、宜しくな」

「うん!」

そんな事を話していると由比ヶ浜のスマホがバイブ機能で震える

「もー、こんな時に…:…つてええ!」

「どうした?」

「ヒツキーヤバイよ!レイズに襲撃があつたつて!」

「嘘だろ!」

すぐに向かおうと思ったが病人である俺が向かうのは如何なものかと思ひ風間さんにLINEで連絡を取ると『明日こい』との事だったので、由比ヶ浜が帰ったら明日に備えて睡眠をとった

八幡達は行動を開始する

三人称 side

翌日八幡がレイズに向かうと、一昨日来た時よりも明らかに荒んでおり、壁に穴が空いていたり爆発でもしたのか焦げてる場所もある

「おいおい……なんだこりゃ」

「ハチくん！」

「おわつ、蒼！どうしたんだよ！」

「彩加君が！彩加君があ！」

「彩加がどうかしたのか!？」

「とにかく来て！」

蒼に引つ張られる形で彩加の元へと急ぐ八幡

そして病室に到着するや否や蒼が扉を開ける

「彩加！大丈夫……か？」

「すう……すう……」

「んっ……♪」

そこには抱き合って寝てる彩加とリベルの姿があった

「蒼、お前……なにこれ」

「凄いでしょ！尊いでしょ！てえてえでしょ！」

「お前心配にさせるような物言いするんじゃないやねえよ！」

「あいたっ！」

頭にチョップを叩き込んだ八幡は何がどうなっているのか訪ねようとする

その時背後から風間がやってきた

「起こすなよ？」

「おわっ！か、風間さん。どうしてですか？」

「狂犬モードの反動やらなんやらでお眠だ」

「狂犬モードを使っただんですか!？」

「ああ、彼女……リベルを助ける為にな」

「……そうなんすか」

「どうかしたのか？八幡」

「あーいや……彩加の夢が叶えられたんだな……って」
「夢？」

尋ねる風間に対して八幡は説明を始める

「彩加とは中学からの付き合いなんです。彩加が1回女性に間違われて強姦未遂に発展したことがあるんすよ」

「はあ!？」

「勿論締め上げましたよ。あの野郎の受験も全部ペアですしね」

その時に彩加は『自分みたいな被害者を無くしたい、誰かを悪意から守りたい』って言ってたんです」

「……そうか。それが叶ったのか」

感慨深そうに呟く風間、しかし直ぐに元の表情に戻り、自分の背に声をかける

「柊」

「ハッ」

すると八幡達の目の前に銀髪赤目の青年が現れる

「情報はどうだ？」

「風間さんの読み通り今回の件は財団Xの人間で間違いないかと、しかし襲撃者は外部からの宿我の可能性が高いです」

「そうか、それを前提に作戦を——」

「風間さん」

「なんだ？」

「誰っすか？この人」

男の存在に思わず質問する八幡に風間は紹介をする

「特犯の情報屋、柊レオだ」

「比企谷八幡さん。よろしくお願いします」

「は、はあ……」

頭を下げる柊に困惑する八幡だが柊は無表情のまま資料を渡し、退室した

「それじゃあ作戦を立てるぞ。今回は特犯も特医も関係ない。日本のははいえ、財団Xを殲滅するまたとないチャンスなんだからな」

「わかりました」

そして風間が退室すると蒼と八幡は椅子に座る

「大規模な作戦になるんだろうな」

「だろうね。現状の装備でどうにかなるかな……」

「俺達は全力で最善を尽くすだけだ。結果がどうであれ、その過程はきつと未来に続いていく」

「そうだね♪」

2人が手を握った時、寝ていた彩加が薄らと目を開き、起き上がる
「んんっ……あれ、2人とも、ここは？」

「レイズの病院、機能が回復したからな」

「そうなんだ……リベルちゃんは……大丈夫そうだね」

「多分明日には治るって、凄い再生能力だよな」

「うん。……よかつたあ」

「んじや俺は手術を始めるかな」

「僕も行くよ？」

「大丈夫かよお前……」

「ほぼ治ってるから、一緒に頑張ろ？八幡♪」

「おう！」

「彩加ちゃんの再生能力も大概よね……」

手術の為オペに向かった2人を見送ると蒼はぼそつと呟き、リベル
の方を向く

「それで、いつまで狸寝入りしてるつもりかな？」

「ッ!？」

リベルの身体が一瞬震え、起き上がる

「い、いつ気付いたんですか？」

「んーっと、多分最初からかな。柊さんが来た辺りから起きてたで
しょっ……」

「は、はい」

「だよな。別にそれについてどうこう言うつもりは無いけど……どう
したの？」

「えっと、その……私も、その作戦に同行する事は出来ませんか？」

「え？」

「も、元は私が蒔いた種だから……」

「気にしなくてもいいよ？リベルちゃんが普通の人で、レイズと関わりがなくても遠くない未来には起きてた事だし、寧ろそれが早まっただけなもの」

「そ、それに！」

「彩加くんの事が不安だから？」

「ッ!？」

「大丈夫大丈夫、言わないから♪」

「そ、そう、ですか……」

「でもまあわかるよ、好きな人の為に何かをしたいって気持ちには」

「そ、それには私には武器がありません。足手まといにはなりません！」

「上には私から掛け合ってみるよ♪」

「あ、ありがとうございます！」

嬉しそうに話すリベルを見て、絶対に通す！と意気込んだ蒼は作戦会議終了後の風間達に掛け合って彩加の監視を条件にリベルの作戦参加を許可したのだった